

高岡の漢学者・寺崎蛸洲—その笑話「困譚」の世界—

磯 部 祐 子

富山大学人文学部紀要第55号抜刷

2011年8月

高岡の漢学者・寺崎蛸洲—その笑話「困譚」の世界—

磯 部 祐 子

一、はじめに

漢文笑話の誕生が江戸や京阪における小咄の簡潔表現や会話止め手法などを導き、小咄の展開に大きく貢献したことは夙に知られる。しかしその先導的役割のみならず、漢文世界を身近なものにした役割も無視することはできない。それは江戸や京阪においてのみならず地方においても同様であった。

小論は、北陸高岡の地で漢学者として生きた寺崎蛸洲の漢文笑話「困譚」^{1,2}を紹介し、「困譚」のもつ笑いの特徴について考察するものである。

そもそも漢文笑話は、漢文階梯の名目の下、江戸中期の寛延年間に岡八駒の手になる『訳準開口新語』が出版され、その影響下に『善謔随訳』、『笑堂福聚』などいくつかの作品が生れて行った。「困譚」は、それらが出版された後、江戸後期の文政甲申（1824年）の秋に上梓されたものである。

二、作者について

作者寺崎蛸洲は越中高岡の人。名は一貫，字伯道，またの字は孟恕といい，蛸洲，櫻廂などの号をもつ。まずは、江戸後期の漢学者・梅辻春樵（1776-1857）によって記された碑銘³からその生涯を見てみよう。

櫻廂老人碑銘並序平安琴希聲字廷調製文江戸大窪行書

櫻廂老人越中高岡人。夙入我栲翁社裏。昔年余遊越後路過越中，始得相值。相值之時，懇懇過我，相分之後，綰綰懷我。數年之間，一鱗一羽，或往或來，往輒必酬我，來輒我亦酬彼。彼與我同是社裏兄弟，固不敢比尋常泛交也。既而不聞消息七八年，北望天涯，其存，其逝，杳乎不可知矣。今茲甲申春聞其訃音。云，前年壬午七月十二日抱病死。年六十有二。嗚呼前有一值

1 先行研究として森銑三に「困譚」を紹介した一文「笑話本雑考 困譚とその作者」（『森銑三著作集』第10巻所収 中央公論社，1989）がある。

2 見返扉に「困譚」，序題・内題・尾題に「困談」とある。草稿本も「困譚」と記すことから，小論では「困譚」を採用する。

3 『高岡史料下巻』（富山縣高岡市役所 印刷者 澤田助太郎 明治四十二年九月二十日發行）に収める。

之縁後無再會之期，終為永訣。豈容不悲哉。老人世住其郷，支族蕃衍，家道頗盛，職為一郷耆長，俗謂之町年寄。其身為市井之人，而心則飄然蟬脫，如山野隱逸，勢利紛華毫不挂其眸。安分知命，頗有鼓腹擊壤之風。一郷以此稱之，莫不為師為友。凡高岡人之知讀書作詩者，以有一個老人也。老人好讀奇書，好吐奇辭異語，一吟一詠，唯恐文字之不奇異。當時，余之作詩，亦趨奇險。而其奇倍余作者萬萬。余讀而不能解之，俟其自解之，而始解頤者往往有之。又善俳歌，譚雜諧謔。性喜酒，然不能四五椀而昏醉，不避席而臥眠，駒々如雷。少頃而起，朦朧嚙語，似睡未醒者，是推敲其詩也。余與老人對酌，每々如此。寔奇人哉。所著櫻廂奇譚，蛸洲餘珠，困談，及詩文數卷，俳書數部，率皆遊戲筆墨而已。老人名一貫，字伯道，一字孟恕，姓寺崎氏，櫻廂蛸洲其二號也。四男，曰，孟章嗣内藤氏，為金澤醫員。曰，敬厚，襲乃父家，曰，桂花，嗣服部氏。曰，士篤，嗣山本氏。二女一嫁一夭。頃日，親戚朋友俱議銘其墓。余與老人，相值在十五六年。今追舊事作之辭曰，游楊立門。雪深盈尺。程孔傾蓋，春風已昔。歲月易馳，逝事難逐。曾游北陸，今猶在目。爰瞻鬢封，新草青青。哭而勒石，且係以銘。立山之下，越海之濱。山高海遠，不見其人。文政七年歲在甲申春三月

(櫻廂老人越中高岡の人。夙に我が栲翁社裏に入る。昔年余越後に遊び路に越中を過ぎり、始めて相ひ値ふことを得たり。相ひ値ふの時、懇懇として我を過し、相ひ分かるの後、縈繞として我を懐かしむ。數年の間、一鱗一羽、或いは往き或いは來たる。往けば輒ち彼必ず我に酬い、來たれば輒ち我も亦た彼に酬ゆ。彼と我とは同じくこれ社裏の兄弟、固より敢へて尋常泛交に比せず。既にして消息を聞かざること七八年、北のかた天涯を望むも、其の存、其の逝、杳として知るべからざるなり。今茲に甲申の春其の訃音を聞く。云ふならく、前年壬午七月十二日病を抱きて死せりと。年六十有二。嗚呼前に一値の縁有りて後に再會の期無く、終に永訣と為る。豈に悲しまざるべけんや。老人世其の郷に住み、支族蕃衍し、家道頗る盛り、職は一郷の耆長と為り、俗にこれを町年寄と謂ふ。其の身市井の人為るも、心は則ち飄然蟬脫として、山野の隱逸の如く、勢利紛華は毫も其の眸に掛けず。分に安んじ命を知り、頗る鼓腹擊壤の風有り。一郷此を以てこれを稱へ、師と為し友と為さざるは莫し。凡そ高岡の人の書を読み詩を作るを知るは、一個の老人有るを以てなり。老人好みて奇書を読み、好みて奇辭異語を吐き、一吟一詠、唯だ文字の奇異ならざるを恐る。當時、余の詩を作るや、亦た奇險に趨く。而るに其の奇は余作に倍すること萬萬たり。余讀みてこれを能く解せず。其の自らこれを解するを俟ちて、始めて頤を解するは往往にしてこれ有り。又俳歌を善くし、譚は諧謔を雜ず。性酒を喜び、然れども四五椀を能はずして昏醉し、席を避けずして臥眠駒々たること雷の如し。少頃にして起き、朦朧嚙語、睡り未だ醒めざる者に似たるも、これ其の詩を推敲せしなり。余と老人は對酌すれば、每々此くの如し。寔に奇人なるかな。著す所の櫻廂奇譚、蛸洲餘珠、困談、及び詩文數卷、俳書數部、率ね皆遊戲の筆墨なるのみ。老人名は一貫、字は伯道、一字孟恕、姓寺崎氏、櫻廂、蛸洲は其の二號なり。四男あり、曰く、孟章、内藤氏を嗣ぎ、金澤の醫員為り。

曰く、敬厚、乃父の家を襲ぐ。曰く、桂花、服部氏を嗣ぐ。曰く、士篤、山本氏を嗣ぐ。二女一嫁一夭。頃日、親戚朋友俱に其の墓に銘すを議る。余と老人、相ひ値ふて十五六年在り。今舊事を追ひてこの辭を作りて曰く、游楊門に立つれば、雪深きこと尺に盈つ。程と孔は蓋を傾けしも、春風已に昔。歲月馳せ易く、逝事逐ひ難し。曾て北陸に遊ぶは、今猶ほ目に在るごとし。爰に鬘封（墳墓）を瞻れば、新草青青たり。哭きて石を勒み、且つ係わるに銘を以てす。立山の下、越海の濱。山高く海遠くして、其の人を見ず。文政七年歳甲申春三月に在り）

[注]一鱗一羽…手紙のこと。 程孔傾蓋…程子と孔子が出会ったとき、馬車の蓋を傾けて心ゆくまで語りあったこと。

碑銘は、寺崎蛸洲について次のように伝える。壬午の年文政5年（1822年）7月12日没。行年62歳。そこから逆算すると1760年生まれである。家は代々町年寄であったが、本人は村瀬栲亭に学び、市井の民として学問を教え、高岡を代表する漢学者であった。人となりは洒脱で、隠逸の人に似て名利に拘泥せず、「鼓腹撃壤して」人生を楽しんだ。多くの人に慕われ、高岡で漢文を学ぶ者はほとんどが蛸洲の教えを蒙った。一方、奇書を読み、文を作ることににおいては、「奇異なる」を好み、独特のこだわりを示した。上述「老人好みて奇書を読み、好みて奇辭異語を吐き、一吟一詠、唯だ文字の奇異ならざるを恐る」はそれをいう。酒はたいして強くはなかったが飲むことは好きだった。酔ってはその場でごうごうと雷のような鼾を立てて眠り、目が覚めれば何をつぶやく。しかしそれは詩の推敲であったという。言辞へのこだわりがここからも推測し得る。

碑銘文を記した梅辻春樵（1776-1857）は、名希声、字廷調、通称勘解由といい、春樵、愷軒と号した。近江の人で、日枝神社の禰宜であり、神職を弟に譲った後は京都に出て塾を開き、文化文政の京都詩壇を代表する人物であった⁴。その詩「癸亥歳晚偶興十首」に「歳歳為人題墓表」と見えることから、齢を重ね墓表を依頼されることも多かったことが窺える。碑には、蛸洲とも一度の面識があり、その後も、手紙の応酬があったと記される。また春樵は、京都の儒学者・皆川淇園（1734-1807）・村瀬栲亭（1744-1818）に学んだ漢詩人で、杉田玄白の晩年の門弟である大槻玄澤（1757-1827）とも交流があった。一方、蛸洲は、皆川淇園⁵にも学を受けた記録が淇園門人帳にも残ることから、春樵は淇園あるいは栲亭との係わりで蛸洲とも面識があったと思われる。また、この碑文は、蛸洲に漢学を学び、玄澤とも係わりがあり、春樵とも旧知であったらう長崎浩斎によって依頼されたと推測される。碑文成立は、小論でとりあげる「困譚」の刊行と同年である。また、行書は、江戸の大窪、すなわち漢詩人であり、画家であり、書家

4 妹尾和夫『村瀬栲亭』（潮流社 1987）による。

5 「皆川淇園門人帳」に寛政9年2月12日に入門したことが記される。宗政五十緒・多治比郁夫編『上方藝文叢刊5 名家門人録集』（1981）参照。

でもあった大窪詩仏（1767-1837）による。

皆川淇園と村瀬栲亭と蛸洲の交流については、『高岡詩話』⁶に引く蛸洲の詞「戲和某琴湖竹枝詞」に、皆川淇園と村瀬栲亭の評が付せられていることから、蛸洲が二人に師事した具体的状況を窺うことができる。また、高岡市立図書館所蔵の『蛸洲詩稿』には淇園・栲亭二人の朱による刪正がある。なお、『高岡史料下巻』には、「第六章 文学 第三節 寺崎蛸洲 第四項 蛸洲の友」の項において、「之れを要するに、蛸洲は高岡に於ける當時の學者として其名遠近に著はれ、交遊する所、大槻玄澤、大窪天民、六如上人、活湛禪師、梅辻春樵、畫人東洋等の諸名流多し。故に寛政年間より文政の初年に至るまで、地方の人士皆仰いで以て文壇の盟主と為し長崎浩齋、清水路園、桑山石蘭、僧櫟堂、澤田等岳、石川雪峽、上原龍圃等皆其門より出づ。蛸洲文政五年（紀元二四八二）七月十二日歿す。行年六十二。」と記される。

現在、高岡市立図書館には、寺崎蛸洲作として次の七種が蔵せられる。

- ① 困譚草稿 附櫻廂奇談 一冊（長崎家文書）1821文政4年
- ② 紅雪楼記稿 一冊（長崎家文書）1820文政3年
- ③ 蛸洲餘珠（北村四郎兵衛出版）1819文政2年
- ④ 蛸洲詩稿一、二
- ⑤ 蛸洲詩草（皆川・村瀬二氏の刪正を経た詩である）
- ⑥ 困譚（文政7刊）

（長崎家文書一冊 佐渡家文書一冊、その他二冊）

- ⑦ 狐の茶袋（京都湖月堂 1816）俳諧集

その他、『高岡史料下巻』には、浄瑠璃「月影御前謎物語」があったことも記されるものの、今日その所在については不明であり、筆者も未見である。しかし、その作品群から漢文学のみならず、日本文学全体への幅広い関心を窺うことができる。

三、「困譚」⁷の出版と「困譚」二序

「困譚」は、文政甲申（1824）年の刊行に成り、榎園藏版。寺崎蛸洲が、文政壬午（5年）7月12日（1822年）に世を去ったことを考えると、刊行の1824年は蛸洲が世を去ってから2年後であり、いわゆる三回忌に当たるとと思われる。上述の碑と同年に、三回忌法事の一環として出版されたものであろう。出版者の榎園とは、小石元瑞（1784-1849）のことであり、京都の

6 『高岡史料下巻』のp706に引く。

7 「困譚」は、『嚙本体系』第二十卷（武藤 禎夫 東京堂出版 1976）に影印本が収められ、また、『日本漢文小説叢刊』第一輯（王三慶主編 臺灣學生書局有限公司 2003年10月初版）には活字本が収められている。

蘭方医であり、また皆川淇園に就いて漢学を学んだ人物である。

序は、平安橘洲陳人序及び鶉郊居士による序の二つがあり、前者は文政辛巳（文政4年）1821年、後者はその前年の文政庚辰（文政3年）1820年に記されたもので、いずれも蛸洲存命の間に記されたことから、出版は没後ではあったが、その企画は蛸洲承知の下でなされたことになる。

橘洲陳人序は次のように記される。

序

睹夫孫壽美而多態，喜作愁眉，墮馬，折腰，齟齬之嫵媚，人人只憐別態，而不問其本色，何邪。文辭亦復爾。輒近藝林，盛梓，隨筆，小録宜以為笑柄已。北越蛸洲翁以雲錦之才揮此。屑屑筆塵，蓋亦佳人之別態也哉。籍茲以解頤不亦哿乎。

文政辛巳春収燈日 平安橘洲陳人題

（夫れ孫壽が美にして多態，喜びて愁眉，墮馬，折腰，齟齬の嫵媚を作すを睹て，人人只だ別態を憐れみ，而してその本心を問はざるは，何ぞや。文辭も亦復爾り。輒近の藝林，盛んに梓し，隨筆，小録^{ほど}宜んど以て笑柄と為せり。北越の蛸洲翁 雲錦の才を以て此に揮ふ。屑屑たる筆塵，蓋し佳人の別態なるか。茲を借りて以て解頤するも哿からずや。）

孫寿(? - 159年)とは、中国後漢の政治家・梁冀の妻であり、『後漢書』「梁統列伝」第24には「壽色美而善為妖態，作愁眉，嚙粧，墮馬髻，折腰步，齟齬笑，以為媚惑」と見える。ここでいう「孫寿の美」とは、後漢時の先端を行くファッションをいい、「愁眉」（細く曲がって愁いを秘めたように描いた眉）、「嚙粧」（泣きはらした様な目）、「墮馬髻」（落馬したように左右非対称の髪型）、「折腰歩」（腰を折ったようなくねくねした歩き方）、「齟齬笑」（虫歯の痛みをこらえたような笑み）などの特徴をもっていたとされる。

序のいうところはおよそ次のようであろう。「孫寿は美しくかつ様々なファッションをする。眉，目，髪型，歩き方，笑い方など個性的である。人々はその個性的姿のみを賞賛し本質は問わない。なぜだろう。このようなことは，文辭においても同じである。今日の学芸の世界は隨筆や小品を盛んに出版し，笑いの種を作っている。そこで，作者蛸洲翁も，その豊かな才能を以って笑話を書くことに腕をふるった。この描き出された一編一編はいわば佳人の個性的姿であり，これを見て大笑いするのもまたよいことではないか。」

この平安橘洲陳人序には，漢文笑話を楽しんだ蛸洲の姿とともに，当時の文芸界全体にあっただろう，本質よりはユニークさ（「別態」）を楽しむ風潮も見え隠れしている。

作者の平安橘洲陳人とは，畑柳泰⁸（1765-1832），本姓上林，名は維禎，字は泄吉，医者であり，皆川淇園に才名を賞された人物である。淇園と交友があり，かつ医者であるという点は，出版

8 『平安人物史』文政5年版にその名がみえる。

の労をいとわなかった小石元瑞らと共通する。実は後に紹介する二つ目の序を記した人物、すなわち蛸洲亡きあとの高岡の文壇をリードし、やはり医者兼漢学者であった長崎浩齋が、この出版を企画し、出版を小石に、序文執筆を畑柳泰に依頼したからである。

では、二つ目の序には何が記されているか。鶉郊居士すなわち長崎浩齋の序には書名のいわれと蛸洲が「困譚」を編んだ理由が記される。浩齋は高岡に生まれ、蛸洲に漢学を学んだ。今日、蛸洲関連の書のほとんどが長崎家文書（高岡図書館蔵）であることから見ても両者の深い交わりを推測できる。ちなみに浩齋が、漢学・蘭学を学んだ医者であり、前掲の大槻玄澤とも深い交流を持った人物であったことは、片桐一男著『蘭学、その江戸と北陸—大槻玄沢と長崎浩齋』（思文閣出版 1993）に詳しい。浩齋の「困譚」序は以下のものである。

蛸洲翁嚮為養痾、寓居於荒邨、其室與獯窩狸巢鄰。翁呵欠、獯亦呵欠。翁噴嚏、狸亦噴嚏。寂々寥寥、更無計消日。於是信筆亂塗三數日、成斯書。予欲災梨棗。翁曰、困投鼠呌、投鼠呌。予問曰、若何。翁曰、邦人錄解頤談者、雖一二行世、文辭頗誤謬、識者困焉。近鑄肖棠輻聚、錯亂不可讀。困之又困者也。然我困人、人亦困我、假令人困我、我亦不欲與彼書同其困也。予曰、不然。以王右軍書論者、尚有家雞野鶩嘆。今其若此、則雖百困何妨。抑有靈困、有寶困、有盲困、有腐困、譬如西施香困、欲遇其困而可得乎。淄澠之水、猶有嘗分者、則善讀者自有辨焉。翁一笑而許之。仍命曰困譚。

文政庚辰六月下澣 鶉郊居士健撰

（蛸洲翁さきに痾を養ふために、荒邨に寓居し、その室は獯窩狸巢と隣す。翁^{かけん}呵欠せば、獯もまた^{かけん}呵欠す。翁噴嚏せば、狸もまた噴嚏す。寂々寥寥として、さらに日を消すを計るなし。ここに於いて筆に信せて乱塗三数日にして、この書を成す。予は梨棗(出版)に災ひせんと欲す。翁の曰く、「困を鼠呌(つまらぬ人間たち)に投げるなり。鼠呌に投げるなり」と。予問いて曰く、「若何」と。翁の曰く、「邦人の解頤談を録するもの一、二、世に行われると雖も、文辭頗る誤謬にして、識者は困す。近ごろ肖棠輻聚を鑄すれども、錯乱して読むべからず。困の困する者なり。然れども我も人を困す。人もまた我を困す。假^{たと}い人をして我を困ぜしむるも、我また彼の書とその困を同じくすることを欲せざるなり。」と。予が曰く、「然らず。王右軍の書を以って論ずるもの、尚、家雞野鶩の嘆あり。今それ此の若ければ、則ち百困すと雖も何ぞ妨げん。そもそも靈困あり、寶困あり、盲困あり、腐困あり、譬へれば西施の香困の如き、その困に遇はんと欲して得べけんや。淄澠の水なお嘗めて分かつ者あり、則ち善く読む者自ら弁ずる有らん。」と。翁一笑して而してこれを許す。仍りて命じて困譚と曰う。

文政庚辰六月下澣 鶉郊居士健撰

[注]家雞野鶩…日常みなれたものを遠ざけ、新しいものやめずらしいものを尊ぶこと。淄澠の水を分かつ者…普通の人の知り得ないことでもよくその道を知る達人のこと。

浩齋の序は、文政庚辰（文政3年）1820年。橘洲陳人の序よりも早く書かれていることから、

浩齋が「困譚」出版の最初から関わっていたことが窺える。そして、序は次のことを示す。第一に、「困譚」という名は蛸洲が病に伏しているときに相談して決めたもので、困とは書名の下の注記に「玉篇云困，匹懸切，音篇，哇聲也」と説明されているように「音は篇」で、「哇おんの聲へん」すなわち「唾する声」を意味する。つまり、「困譚」とは、「へんたん」と読み唾棄すべき話という謂であること。第二に、作者はこの笑話集を「唾棄すべき話」であるとして、当初出版を辞退していたが、「困」にも魅力的なものがありその道に通じたものはその「困」を評価できるという浩齋の勧めによって最後は出版を許可したということ。第三に、執筆に至った動機である。それは、「解頤談」すなわちこれまで作られた漢文笑話に誤謬が多く、唾棄すべき存在であると感じたこと、とりわけ近ごろ出版された「肖棠輻聚（笑堂福聚）」の漢文表現が「錯乱」していることに憤り、自ら筆を染めることにしたと読み取れる。総じて、「困」という「奇異」な言葉には、表面上の自嘲めいた意味とは反対に、漢文笑話創作に対する強い作者の自負が込められていると見ることができる。

一方、浩齋と蛸洲の関係についていえば、「その困に遇わんと欲して得べけんや。溜瀼の水なお嘗めて分かつ者あり、則ち善く読む者自ら弁ずる有らん。（その唾棄すべきものに遇おうとしても遇えるでしょうか。なかなか遇えないものです。溜瀼の水でさえなめて弁別できる人がいるものです。よく読む人にはわかるものです。）」という一文から、浩齋が中心となり出版を慫慂し、企画、遂行したということがはっきりと読みとれる。浩齋の、恩師・蛸洲に対する敬愛の念の表れであろう。

では、蛸洲「困譚」の世界はいかなるものか。次章にて、笑話作品41話について、文政7年出版の刊本に依り解釈を加えよう。尚、原文の訓点は割愛するが、書き下しはほぼ原文の訓点に従う。

四、「困譚」解釈

高岡 木一貫孟恕戯著

1

粵北一監生游学東都。一日，過兩國橋。有一人鳩面鶉服，露坐橋側，賣妖狐七變愧圖。審諦便舊酒侶某乙也。各道契闊。乙曰，欲獻君一杯。如何腰囊空如。因以狐圖五紙團而擲諸水中，曰，一圖價六錢，今棄却三十錢。聊以表寸志。幸君知我言不虛也。生感愴久，而脫劍，亂舞一迴，故打酣狀。答兄盛意耳。（粵北の一監生東都に游学す。一日，兩國橋を過ぐ。一人有り鳩面鶉服，橋側に露坐し，妖狐七變愧の圖を賣る。審諦すれば便ち舊酒侶某の乙なり。各契闊を道ふ。乙

9 なお「玉篇」にこの記載はなく、『康熙字典』に「玉篇云困匹懸切音篇哇聲也」の全文があることから、『康熙字典』の孫引きであることが分かる。

曰く、「君に一杯獻ぜん^とと欲す。腰囊空如なるを如何せん。」と。因りて狐圖五紙を以て團して諸を水中に擲て、曰く、「一圖の價六錢、今三十錢を棄却す。聊か以て寸志を表す。幸いに君我が言の虚ならずを知らん。」と。生感愴久しくして、劍を脱し、亂舞一迴、故に酣狀^{ことさら}を打す。「兄が盛意に答ふるのみ。」と。）

[訳] 越北の一学生が江戸に遊学していた。ある日、両国橋を過ぎると一人の貧相な顔つきでみすぼらしいみなりの男が橋の傍らにすわり、妖狐七変化の絵を売っていた。よく見れば昔の飲み友達の乙某であった。互いに久闊を叙した。乙が言った。「あなたに一杯差し上げたいと思うのですが、財布の中が空っぽなのはどうしようもありません。」そこで狐の絵を五枚丸めて、川に擲って言った。「一枚の絵の値段は六錢であり、今三十錢分を投げ捨てました。それで、いささか私の気持ちを表したのでございます。なにとぞ私の申し上げたことが嘘でないことをお分かりください。」その学生は感激して、劍を抜いて舞い、わざと酔ったふりをした。「あなたのお気持ちに答えようと存じます。」

[注] 見立てによる応酬話であり、類話として、『軽口浮瓢筆卷二』「ほうらく酒」（寛延4年1751）、『善謔随訳』（安永4年1775）がある。

2

衆措大聯袂上酒樓。主人有一女、年十六七、姿色嫣然。出而侍杯酌。各意、雖文君未之及也。欲得其歡心、或鬪拳、或歌舞。酒酣、女向一人、竊引其手、指書掌、作宿字。其人喜出望外、而含眸跣坐、嘿々不語。各曰、一人向隅、滿坐不樂。其人曰、我善養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。（衆措大、聯袂して酒樓に上る。主人に一女有り、年十六七、姿色嫣然たり。出でて杯酌^{おのおの}に侍す。各意ふ、文君と雖も未だこれに及ばざるなり、と。其の歡心を得んと欲し、或ひは鬪拳し、或ひは歌舞す。酒酣にして女一人に向ひ、竊かに其の手を引き、掌に指書して、宿の字を作る。其人喜ぶこと望外に出でて、眸を含みて跣坐し、嘿々として語らず。各曰く、「一人隅^{おのおの}に向はば、滿坐樂しからず。」と。其人の曰く、「我善く吾が浩然の氣を養ふ。」と。「敢えて問ふ。何をか浩然の氣と謂ふ。」と。「曰く、言ひ難きなり」と。）

[訳] 多くの貧乏書生が袂を連ね飲み屋にやってきた。飲み屋の主人には一人娘があつて、年の頃十六、七。その姿は艶めかしかつた。娘が出てきて酌をした。みな、卓文君であつてもこの娘の器量には及ばないだろうと思つた。氣を惹こうとして、ある者は鬪拳を行い、ある者は歌い舞つた。酒宴がたけなわになると、娘が密かに一人の前に行き、その手を引いて、掌に指で「宿」の一字を書いた。その人は望外の喜びに、目に思いを含んであぐらを組んだまま黙ってしまった。みなが言つた。「一人だけそっぽをむいては皆楽しくなくなりますよ。」その人は言つた。「私は浩然の氣を養つているのです。」「おうかがいします。何を浩然の氣と言うのですか。」男は言つた。「いわく言い難いことでございます。」

[注] 孟子『孟子』「公孫丑上」の「我善養吾浩然之氣。何謂浩然之氣。曰、難言也。」を用いた心情の誇張ばなしであり、類話に『善譚随訳』（安永4年1775）がある。「浩然の氣」とは、物事にとらわれない、おおらかな心持ちをいう。

3

淀河渡、一舟戴十數人行。一客忽嘆曰、人誠萬物之靈也哉。傍人問曰、何如。曰、若使舟中、皆狗則鬪咬、應不相容。（淀河の渡、一舟十數人を載せて行く。一客忽ち嘆ひて曰く、「人は誠に萬物の靈なるかな。」と。傍人問ひて曰く。「何如ぞ。」と。曰く、「若し舟中をして皆狗ならしめば、則ち鬪ひ咬みて、應に相ひ容れざるべし。」と。）

[訳] 淀川の渡し船は一隻に十数人を乗せていく。一人の客が突然、嘆いて言った。「人はまことに万物の中で最も優れたものであることよ。」傍らの人が訊いた。「どういうことか。」「もし船の中にいる者が、みな犬であったら、噛み合って一緒の船に乗ることはできないであろう。」

[注] 『書経』「泰誓上」の「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」を用いた誇張ばなしである。

4

夜立路傍、賣淫者、俗謂之總嫁。或曰夜鷄。一點奴過之、曰、我有二十錢。恨欠四錢。請贖償之。總嫁意、渠若不償、纔是四錢。乃諾之。次夕、往償之。反身欲去。總嫁執袖不放。奴曰、實慚空囊。總嫁念是老實。曰、明夕復來償之。奴遂一箭射兩鵬、後不再踏其地。（夜路傍に立ちて、淫を賣る者、俗にこれを總嫁と謂ふ。或ひは夜鷄と曰ふ。一點奴これを過ぎて、曰く、「我二十錢有り。恨むらくは四錢を欠く。請ふ贖くこれを償せ。」と。總嫁意ふ。渠れ若し償わずとも、纔に是れ四錢なり、と。乃ちこれを諾す。次夕、往きてこれを償し、身を反して去らんと欲す。總嫁袖を執りて放さず。奴曰く、「實に空囊を慚づ。」と。總嫁念ふ、これ「老實」と。曰く、「明夕復た來たりてこれを償へ。」と。奴遂に一箭兩鵬を射て、後再びは其の地を踏まず。）

[訳] 夜、路傍に立ち、春をひさぐ者を俗に総嫁、或いは夜鷹という。一人の悪がしこい者がそこを通りかかって言った。「私は二十錢あるが、残念なことに四錢足りない。どうかしばらく貸していただけないか。」総嫁は思った。仮に金を返してくれないとしても、たったの四錢ではないか。そこで承諾した。男は次の日の夕暮にまたやって来て金を返すと、身を翻して帰ろうとした。総嫁はその袖を取って放さなかった。男が言った。「財布に金がなく恥ずかしい。」総嫁はこの男は律儀者だと思って言った。「明日の夕暮、また来て返してくださいな。」ついに、男は一挙兩得を叶え、その後、二度とそこに来ることはなかった。

[注] 当時の総嫁の通り相場は二十四錢である。本来、人をあざむくと思われた総嫁がかえって狡猾な男にあざむかれる話で、数字にまどわされる類話として『訳準開口新語』「壺算」（寛延4年1751）がある。

5

老尼姑，令雛尼往市豆腐。道有飢鳶。忽攫腐牒去。雛尼回，告尼公。尼公急遣人，報腐家曰，倘有鳶將吾牒來沽，必勿賣與。（老尼姑，雛尼をして往きて豆腐を市しむ。道に飢鳶有り。忽ち腐牒を攫りて去る。雛尼回りて、尼公に告ぐ。尼公急ぎ人を遣はして、腐家に報じて曰く、「倘し鳶有りて吾が牒を將來たりて沽んとするも、必ず賣與することなかれ。」と。）

[訳] 年配の尼が見習い尼に豆腐を買いに行かせた。道中に空腹の鳶がいて、豆腐の通い牒を奪いとって行った。見習い尼は家に戻って年配の尼に報告した。年配の尼は、急いで豆腐屋に人をつかわして告げさせた。「鳶が私の通い牒を持ってきて買おうとしても絶対に売らないでください。」

[注] 鳶が通い牒で豆腐を買うわけではないのに、慌てふためく年配尼の愚か話で、類話に『軽口はなしとり』「とうふのかよひ」（享保12年1727）、『軽口福おかし』「焼鳥にへを」（元文5年1740）、『はなしの種』「とんびの通とり」（天保10年1839）がある。

6

群乞兒市中拾鯛頭代錢，環坐擲骰。邦人以温魚為鯛，相沿已久，遂不能廢。今亦從俗体書之。肆内一人欲入其局，便提一大棘鬣魚髑髏出。群兒驚曰，我們輸贏不異螻蟻爭鬪，寧為鉅鹿大戰邪。敢辭。（群がる乞兒，市中にて鯛頭を拾ひ，錢に代へて環坐して骰を擲つ。邦人温魚を以て鯛と為し，相ひ沿ふこと已に久し。遂に廢すること能はず。今亦俗体に従ひてこれを書く。肆内の一人其の局に入らんと欲し，便ち一大棘鬣魚の髑髏を提げて出づ。群兒驚きて曰く、「我們的輸贏は螻蟻鬪に異ならず。寧ろ鉅鹿の大戦を為さんや。」と。敢へて辭す。）

[訳] 多くの乞食の子供たちが市中で鯛の頭を拾い、それを錢の代わりにして、車座になって博打打ちをしていた。〔日本人は温魚を鯛と言うのが慣わしとなって久しい。（鯛という表記を）廢することは出来ないで、今回は俗体に従ってこのように書く。〕町の一人がその仲間に入りたいと鯛のされこうべを引提げてやってきた。乞食の子供たちは驚いて、「私たちの争いなんてちっぽけな螻蟻の争いにすぎない。（項羽と劉邦が争った）鉅鹿の戦いなどできない。」と言って断った。

[注] 鯛と鯛の対比に「螻蟻鬪・鉅鹿大戦」（『史記』「秦始皇本紀」）を用いた誇張ばなしである。

7

一富翁以慳吝起家。某乙亦有此癖。然家尚乏。欲受翁教。往而見之，以一稻稈為束脩。曰，君穿煙管，以此易紙條，冀省其費。翁曰，汝未知蓄法，恐不能致富。乙曰，為何。翁曰，汝費太奢。大是破費。若使我為之，斷為數芒，分而饋於聚，以做脚麻藥。（一富翁慳吝を以て家を起す。某乙亦この癖有り。然れども家尚ほ乏し。翁の教へを受けんと欲す。往きてこれに見ゆるに、一稻稈を以て束脩と為す。曰く、「君煙管を穿くに、これを以て紙條に易へ、冀はくは其の費

を省かんことを。」と。翁の曰く、「汝未だ蓄法を知らず、恐らくは富を致すこと能はざらん。」と。乙の曰く、「^{なんす}為何れぞ。」と。翁の曰く、「今汝が^{はなは}費太だ奢る、大いにこれ破費せん。若し我をしてこれを為さしめば、斷じて數芒と為し、分けて聚に^{おく}饋り、以て脚麻の薬と做さん。」と。）

[訳] ある富豪の翁は吝嗇だったので、家を興すことができた。某乙にもまたその癖があったが、家は貧しいままだった。そこで翁の教えを受けようと思い、翁のもとに行き、まみえたが、その際に一束の^{わら}藁しべを入門料として渡して言った。「煙管の掃除の時に用いるこよりの代わりにしてください。(あなたさまのこより代が)節約できますように。」翁は言った。「あなたはまだ吝嗇の方法というものを知らない。たぶん金持ちにはなれないだろう。」乙は言った。「どうしてでしょうか。」翁は言った。「今のあなたは贅沢だ。とても錢を無駄にしている。もし、私だったら、^{わら}藁しべを二、三本ずつ分けて多くの人に贈り、足の痺れを取る薬とするだろう。」

[注] 「痺れが切れた時は額に^{わら}藁しべを付けると治る」という言い伝えにもとづいた^{しむ}吝話で、類話に『当世軽口咄揃』「しはき医者の事」(延宝7年1679)、『立春噺大集』「しはん坊」(安永5年1776)、『ふくら雀』「儉約」(天明9年1789)、『おとぎばなし』「儉約」(文政5年1822)、落語「始末の極意」がある。

8

某侯開廩糶於他州。沽艘入閘也、運丁蟻聚、邱山立盡。一老夫後至、一囊不能負、乃獨語曰、願以侯為吾伯叔、我亦無愁也。傍人聞之、笑曰、果然、爾欲謀何事。答曰、大倉十萬、我一人以運之、飽給其傭錢耳。(某侯廩を開きて他州に^{うりだ}糶す。沽艘閘に入るや、運丁蟻聚して、邱山も立ちどころに盡く。一老夫後れて至り、一囊も負ふこと能はず、乃ち獨語して曰く、「願はくは侯を以て吾が伯叔と為さば、我も亦愁ふること無からんや。」と。傍人これを聞いて笑ひて曰く、「果して然らば、^{なんじ}爾何事を謀らんと欲するや。」と。答えて曰く、「大倉十萬、我一人、以てこれを運ばせ、飽くまで其の傭錢を給せんのみ。」と。)

[訳] ある大名が倉を開き、不作であった他州に米を売り出した。売りに出た船が水門に入ると、運丁が蟻のように集まり、山のようにあった米もすぐに運び尽くした。一人の老夫が遅れてやってきて、一袋も運べなかった。そこで独り言を言った。「大名が私の叔父であったならば、私も思い悩むことはなかったろうに。」と。傍らの人がこれを聞いて、笑った。「もしそうであったならば、何をしようと思ったのか。」「倉の十万俵を私一人に運ばせ、たっぷりと手間賃を与えるのさ。」

[注] 老夫の負けおしみ話である。

9

一篙夫患目疾、百草不醫。妻兒愁甚。夫曰、東鄰某以賞鑒起家、我亦略識刀劍。若夫為瞽、何

愁無糊計。妻笑曰、此術殊假目神。何忽發風狂語也。夫曰、不然。其纏絲者為縦、其輪者為鏢、其漆者為室、外如鉞、鈇、鑷、鏢。亦一摸索可即辨識。兩目奚用之為。(一簞夫目疾を患ひ、百草醫さず。妻兒愁ふること甚し。夫の曰く、「東鄰の某賞鑿を以て家を起こし、我亦略刀劍を識る。若し夫れ瞽と為りとも、何ぞ糊計無きを愁えんや。」と。妻笑ひて曰く、「此の術殊に目神を假る、何ぞ忽として風狂の語を發するや。」と。夫曰く、「然らず。其の糸を纏ふ者を縦と為し、其の輪なる者を鏢と為し、其の漆なる者を室と為す。外は鉞、鈇、鑷、鏢の如し。亦一たび摸索すれば即ち辨識すべし。兩目奚ぞこれを用ひるを為さん。」と。)

[訳] 一人の竹職人が目の病を患った。色々な葉草を用いても治らなかった。妻と子は非常に悲しんだ。夫は言った。「東隣りの某は鑑識でもって家を興した。私も刀劍の知識がある。仮に盲人になったとしても、食べていく手立てがないなどと心配するには及ばない。」妻は笑った。「その技は特に目が要ります。どうして唐突に馬鹿なことを言うのですか。」夫は言った。「いやいや、そうではない。その糸を纏ったところは柄である。その輪となっているところは鏢である。その漆を塗ってあるところは鞘である。他は刀の切っ先、刃、柄頭の飾り、鞘の切っ先であろう。ひとたび手で触ってみれば見分けることができるものだ。どうして両目など用いる必要があるか。」

[注] 刀の鑑識のなんたるかを知らない人間の愚か話である。

10

四方角觥夫、悉聚於京師、東西分而為兩隊、各較勝負。西之魁頭號丸山、東號八角。丸山、怖角驍勇。於此、竊祈清水觀音、曰、願大士援手、使角一打觥斗。以致吾名。大士曰、百託不辭、惟此一事、吾所不能。丸山曰、大士嘗為田將軍塵百鬼。誰不仰其顯聖。然今以一角夫為難、吾不甘也。大士曰、汝誤矣。近年、吾祠為六角所壓、香花零落、即世之所知也。六角猶不能制、然況八角乎。(四方の角觥夫、悉く京師に聚まり、東西分かちて兩隊と為し、各勝負を較す。西の魁頭は丸山と號し、東を八角と號す。丸山、角の驍勇を怖る。ここに於いて、竊かに清水觀音に祈りて曰く、「願はくは大士援手して、角をして一たび觥斗を打たしめよ。以て吾が名を致さん。」と。大士曰く、「百託辭せず、惟だ此の一事のみ、吾が能はざる所なり。」と。丸山曰く、「大士嘗て田將軍の為に百鬼を塵す。誰か其の顯聖を仰がざらん。然れども今、一角夫を以て難と為す。吾、甘んぜざるなり。」と。大士曰く、「汝誤れり。近年、吾が祠、六角の為に壓せらるるところなり。香花零落、即ち世の知る所なり。六角猶ほ制すること能はず、然るに況んや八角をや。」と。)

[訳] 四方の相撲取りが皆残らず京都に集まり、東西を分けて二隊とし、各々勝ち負けを競った。西の頭目の名を丸山といい、東は八角といった。丸山は八角の強くてたくましいことを恐れた。そこで密かに清水觀音に祈った。「どうか、菩薩様のご加護により、八角を打ち破らせ

てください。そして私の名が轟くようにしてください。」菩薩は言った。「あらゆる頼みは聞き入れましょう。しかしこの頼みごとだけは聞きません。」丸山は言った。「観音様はかつて坂上田村麻呂将軍のために悪鬼を退治されました。その靈験のあらたかさを仰がない人がいますか。それなのに今、一人の角力士を破ることは出来ないとおっしゃられます。納得できません。」観音は言った。「あなたは勘違いしている。近年私の祠が、六角堂のせいでやられてしまい、線香も絶え、参拝者が少なくなったことは世間の知るところです。六角でも制することができないのに、どうして八角を制することなどできましょう。」

[注] 坂上田村麻呂は、蝦夷討伐の時に清水観音を帯同して、勝利を収めたという。江戸時代、六角堂は観音霊場の寺として庶民の信仰を集め、門前町は洛中では有数の旅宿町となった。それらを背景としている。また、六角と八角をかけたことば遊びの話である。

11

一人語曰、偶觀戲人。擲五毬納眼竅、忽從鼻孔出之。可謂絕技也。坐有小廝笑、曰、是何足為奇。往夕、吾家老爺、捫一虱、曰、今以此物投唾壺。即于頸畔取之。果如其言。若此或腹或背、以迄腰際腿上、百不差一。滿坐絕倒。(一人語りて曰く、「偶^{たまたま}戲人を觀る。五毬を擲^{なすき}へて眼竅^{きよう}に納め、忽として鼻孔よりこれを出す。絶技と謂ふべし。」と。坐に小廝有りて、笑ひて曰く、「これ何ぞ奇と為すに足らん。往夕、我が家の老爺、一虱を捫りて曰く、『今この物を以て唾壺に投ず。即ち頸畔に于いてこれを取らん。』と。果して其の言の如くす。かくの若く、或ひは腹或ひは背、以て腰際、腿上に迄るまで、百に一も差はず。」と。滿座絶倒す。)

[訳] ある人が言った。「偶然に曲芸師を觀た。五つの球を眼の穴の中に入れて、あっという間に鼻の穴から取り出した。これは素晴らしい技だ。」傍に小僧がいて、笑って言った。「それがどうして素晴らしい技と言えるのか。我が家の旦那さまは一匹の虱を捻り潰して、今これを痰壺の中に投げ入れてすぐ首筋から虱を出してみせるぞといい、その言葉の通りにする。このようなことを腹や、背、腰の際、腿の上に至るまでどこからだっしてみせるんだ。」皆は抱腹絶倒した。

[注] 曲芸師の技と、身体中虱だらけの主人の虱取りとを同類とみた、小僧の愚か話である。

12

一隻途行、墜一隻履於橋下。適有花子來。乃謂之曰、僮下取履、我與僮一錢。花子曰、請賜二錢。俺便做張良。叟少低思、復墜一隻、曰、願一雙三錢以取之。(一隻途行くに、一隻の履を橋下に墜とす。適^{たま}たま花子有りて來たり。乃ちこれに謂ひて曰く、「僮^{なんじ}下りて履を取れば、我、僮に一錢を與へん。」と。花子曰く、「請ふ二錢を賜へ。俺^{われ}便ち張良と做らん。」と。叟少しく低思、復た一隻を墜として曰く、「願はくは一雙三錢以てこれを取れ。」と。)

[訳] ある翁が道を歩いていて片方の履物を橋の下に落としてしまった。たまたま乞食がやってきた。そこで翁は乞食に言った。「下に降りて、履物を取ってきてくれたら、お前に一銭を与えよう。」乞食は言った。「どうか二銭をください。私は張良となりましょう。」翁は少し考えて、もう片方の履物を落として言った。「一足三銭でこれを取ってきてくれ。」

[注] 能「張良」（観世小次郎信光作）にみえる「漢の高祖の軍師である張良が黄石公の川に落とした杵をとってその人柄を認められる」話のパロディであり、「張良とならん」の一言にほだされ、一銭で済むところを三銭も出すことになった翁の愚か話である。

13

兩人鬪毆，甲斬乙做兩段，而乙不死，兩骸並活。官檢之，呼醫以藥敷瘡口，數日方愈。而家貧，衣食不給。於此上半截便賃輿至江戸，賣身于撫標參將家做望火樓兵。下半截備于里中麩舗，做踏麩奴。月餘，兵寄書麩家，曰，弟無恙耶。近我患目。要速降氣。備當灸三里。奴迺報書，曰，俺亦煩兄。比日小便頻數。戒而不須多飲水。（兩人鬪毆す。甲は乙を斬り兩段に做す。而して乙死せず。兩骸並びて活く。官これを檢し，醫を呼び，藥を以て瘡口に敷しむ。數日方^{まさ}に愈えり。而して家貧しくして，衣食給せず。ここに於いて上半截は便ち輿を賃して江戸に至り，身を撫標參將の家に賣りて，望火樓の兵と做る。下半截は里中麩舗に備され，踏麩奴と做る。月餘にして，兵の書を麩家に寄せて，曰く，「弟恙無きや。近ごろ我目を患ふ。速やかに氣を降さんことを要す。備當^{なんじまさ}に三里に灸すべし。」と。奴迺^{すなわ}ち書を報じて曰く，「俺れも亦兄を煩す。比日小便頻數す。戒めて多く水を飲むことを須^{もち}みざれ。」と。）

[訳] 二人が喧嘩した。甲が乙を斬り、胴を真つ二つにした。しかし、乙は死なず、二つになった骸は両方とも生きていた。役人がそれを検分して、医者を呼んで、薬を傷口に塗ったところ、数日して治った。しかし家が貧しくて生活が立ち行かない。そこで上半身は輿を借りて江戸に行き、自らを武家の家に売り、火の見櫓の兵となった。下半身は田舎の麩屋に雇われて、麩を踏む仕事に就いた。一月あまりして、兵が手紙を麩屋に送ってよこした。「弟よ、恙無く暮らしているか。近頃私は眼を患った。急いで氣を鎮めたいと思う。おまえの膝下（三里）に灸をしてくれ。」麩屋の弟は返事を書いた。「わたしもまた兄者にご面倒をおかけいたす。この頃、小便の回数が頻繁になった。水をあまり多く飲まないようにしてください。」

[注] 斬られて二つになった身体がそれぞれ仕事にありつき、^{ふみ}文を交わすナンセンス話で、類話として、『軽口ひやう金房』「火の見矢蔵の事」（元禄末頃）、『軽口あられ酒』「けんくわどう切」（宝永2年1705）、落語『胴斬り』（首提灯のまくら）がある。

14

二郷人入城，見一門貼角大師圖。甲曰，是何神。乙曰，牛做安禪耳矣。（二郷人城に入りて，

一門に角大師の圖の貼れるを見る。甲の曰く、「これ何の神ぞ。」と。乙の曰く、「牛安禪を做すのみ。」と。）

[訳] 二人の田舎者が町にやってきて、入り口に相撲取りの錦絵が貼ってあるのを見た。甲が言った。「これは何の神様だろう。」乙が言った。「牛が静かに座禪をしているところだ。」

[注] 田舎者の無知を笑う見立て話。

15

偷兒踰牆入。主人未寐，欲捕之，潛起，先塞其退路。偷兒見之，窘甚。乃趨而至門下，交兩手懸于楣杙。主人曰，爾欲投擲耶。偷兒應曰，非人，是乾菜也。曰，菜何得發聲。曰，未全乾了。（偷兒牆を踰えて入る。主人未だ寐ねず，これを捕らへんと欲し，潛かに起きて先ず其の退路を塞ぐ。偷兒これを見て，窘まること甚し。乃ち趨りて門下に至り，兩手を交へて楣杙に懸ける。主人曰く，「爾環に投せんと欲するか。」と。偷兒應へて曰く，「人に非ず，これ乾菜なり。」と。曰く，「菜何ぞ聲を發することを得んや。」と。曰く，「未だ全くは乾了せず。」と。）

[訳] 盗人が垣根を越えて入ってきた。主人はまだ寝ておらず，盗人を捕えようと思い，そつと起きて，まずその退路を塞いだ。盗人はこれを見て，どうしようもなくなった。そこで走って玄関の下まで来ると，両手で梁にぶら下がった。主人は言った。「おまえ首つりをするつもりか。」盗人は答えた。「私は人ではない。干し菜だ。」主人は言った。「菜っぱがどうしてしゃべったりするものか。」「まだ乾ききっていないのさ。」

[注] 盗人が窮まってとった行動の言い訳を「落ち」とするナンセンスな見立て話で，類話に『醒睡笑』『蜘蛛の真似して遊ぶ』（寛永5年1628），『軽口花咲顔』『不功なぬす人』（延享4年1747），『訳準開口新語』（寛延4年1751），『聞上手三篇』『泥坊』（安永2年1773）がある。

16

百蟲會盟。獨蟬稱病不至。王命百足往而責之。而日中未發。王怒，治其罪。蛙子從傍諫曰，暫緩之。雖兩翅四蹄者，尚有行裝。況他着百鞋乎。（百蟲會盟す。獨り蟬のみ病と稱して至らず。王百足に命じて往きてこれを責めしむ。而るに日中なるも未だ發せず。王怒りて，其の罪を治めんとす。蛙子傍より諫めて曰く，「暫らくこれを緩めよ。兩翅四蹄なる者と雖も，尚ほ行裝有り。況んや他れ百鞋を着るをや。」と。）

[訳] 百虫が集まって盟約を結ぼうとした。蟬だけが病と称して来なかった。王は百足に蟬を咎めてくるよう命じた。しかし，百足は日中になっても出発しなかった。王は怒ってその罪をただそうとした。蛙が側から諫めて言った。「まあまあ，そう厳しくなさらないでください。一對の羽と四本足のものでも，旅の装いというものがございます。まして百足なら百足の靴を履かなくてははいけません。」

[注] 百足の身じたくには時間がかかるというへ理屈話で、類話に『前戯録』「蜈蚣後期話」(明和7年1770), 『楽牽頭』「百足」(明和9年1772), 『茶のこもち』「百足」(安永3年1774), 『売言葉』「むかで」(安永5年1776)がある。

17

或曰、哈密地方産南天燭。其大者如柱。所謂邯鄲之枕、以此樹製之。一秀才聞之、欲續黃梁。自念、吾邦所生雖叢々如草、古人聚千螢易一燈、其理或均矣。於是多摘枝葉、藉之以臥。已醒蹙然、不語移時。其妻問云、為何。曰、吾大失望、只化一筒棘鬣魚眠于籃底而已。(或るひと曰く、哈密地方に南天燭を産す。其の大なる者は柱の如し。所謂邯鄲の枕は、この樹を以てこれを製す。一秀才これを聞きて、黄梁を續けんと欲す。自ら念ふ、吾が邦の生ずる所は叢叢草の如しと雖も、古人千螢を聚め一燈に易ふ、其の理或ひは均しからん、と。ここに於いて多く枝葉を摘み、これを藉りて以て臥す。已に醒めて蹙然として、語らざること時を移す。其の妻問ひて云く、「為何れぞ。」と。曰く、「吾大いに望を失へり。只だ一筒の棘鬣魚と化して籃底に眠るのみ。」と。)

[訳] ある人が言った。「哈密地方は南天の木産地である。その大きなものは柱のようである。いわゆる邯鄲の枕というものはこの木で作られたものだ。」ある学生がそれを聞いて黄梁の夢の続きを見たいと思った。我が国で生じたものは細い草のようであるとはいえ、古人には雪雪の光の故事もある。それと同じではないか(集めれば大きなものになる)と思った。そこで細い枝をたくさん摘み、これを敷いて横になった。目が覚めると、眉をひそめたまま長い間黙っていた。妻が訊いた。「どうしたのですか。」「私はとても失望した。ただ一匹の鯛になって魚籠の底で眠っただけだった。」

[注] 南天の細枝でかごをつくり、邯鄲の夢を求めた愚か話で、類話に、『夜明烏』「邯鄲のまくら」(天明3年1783), 『軽口浮瓢筆』「邯鄲のまくら」(寛延4年1751)がある。

18

科埜善光寺如來出而募化。寶幡停處、香侶雲集、遂抵京師、參見毘盧佛。毘盧時有燒眉急、少求捐助。如來問、幾許。毘盧曰、僅不過一囊耳。如來領諾。而及視其囊、大可容數斛。大駭不知所為。諺曰、于大佛前拾空耳、還家視之、乃是飯匙。如來偶忘之、業既許之。不可復食言。進退惟谷、遂竟向毘盧請索一杯水。毘盧問、若何。曰、欲投其中死而已。(科埜善光寺の如來出でて募化す。寶幡の停まる處、香侶雲集し、遂に京師に抵り、毘盧佛に參見す。毘盧時に燒眉の急有りて、少しく捐助を求む。如來問ふ、「幾許ぞ。」と。毘盧曰く、「僅かに一囊に過ぎざるのみ。」と。如來領諾す。而して其の囊を視るに及びて、大きき數斛を容るべし。大いに駭きて為す所を知らず。諺に曰く、「大佛前に于いて空耳を拾ひ、家に還りてこれを視れば

乃ちこれ飯匙なり」と。^{たまたま}如來 偶^{つひ}これを忘れ、業に既にこれを許す。復た食言すべからず。進退惟れ谷まり、^{つひ}遂に^{つひ}竟に毘盧に向かひ一杯の水を請ひ索む。毘盧問ふ、「^{いかん}若何するぞ。」と。曰く、「其の中に投じて死せんと欲するのみ。」と。）

[訳] 信濃の善光寺の如來が布施を募りに出かけた。幟が上がるころには善男善女が集まり、ようやく京都に至り毘盧仏に参見した。毘盧仏はその時、経済逼迫のため、幾許かの義援を求めた。如來は訊いた。「いかほどでしょうか。」毘盧仏は言った。「ほんの一袋をお願いします。」如來は承諾した。しかし、袋を見ると、その大きさは一升瓶が数百本入るほどであった。大いに驚いて為す術がない。諺にいう、「大仏の前にて耳かきを拾い、家に帰ってこれを見れば、しゃもじなり」と。如來はたまたまこの諺を忘れて承諾してしまったのである。偽ることもできない。進退これにきわまり、ついに毘盧仏に向かつて一杯の水を乞うた。毘盧仏は尋ねた。「どうするというのですか。」「ただその中に身を投じて死のうと思ひます。」

[注] 大仏の大きさをモチーフにした大ばなしで、類話に、『醒睡笑』「大杓子は鬼の耳搔き」（寛永5年1628）、『是楽物語』（明暦年間1655～寛文初年1661）、『当世軽口咄揃』「駕籠かきはまる事」（延宝7年1679）、『当世手打笑』「大仏にて太箸を拾ふ事」（延宝9年1681）、『初音草嚙大鑑』「恥をあらハす古脚布」（元禄11年1698）、『坐笑産』「大仏」（安永2年1773）、『初登』「大仏」（安永5年1776）、『しみのすみか物語』「餅を買て捨子を拾ふ男の事」（文化2年1805）がある。

19

昔有二刹、並門而居。一奉日蓮教、一為淨土門。平日相謗相嫉如讎。日寺畜狗、名法然。法寺亦飼犬、呼日蓮。一日兩狗鬪。日狗忽為法狗被昨殺。日寺誇、曰、吾家黃耳、口飽美飯。他舐糠狗、胡能敵狡狴。法寺聞之、笑曰、日蓮狗吾餌以糞丸、其鬪而死、固也。（昔二刹有り、門を並べて居す。一は日蓮教を奉じ、一は淨土門を為す。平日相謗り相嫉むこと讎の如し。日寺狗を畜ひて、法然と名づく。法寺も亦た犬を飼ひて、日蓮と呼ぶ。一日兩狗鬪ふ。日狗忽ち法狗の為に昨殺さる。日寺誇りて曰く、「吾家の黃耳、口は美飯に飽く。他の舐糠狗、胡ぞ能く狡狴に敵せん。」と。法寺これを聞きて笑ひて曰く、「日蓮狗、吾れ餌^{えさあた}ふに糞丸を以てす。其の鬪ひて死するはもとより。」と。）

[訳] 昔、二つの寺があり、二軒並んでいた。一つは日蓮宗を奉じ、もう一つは淨土宗に皈依していた。平素から互いに罵り合い、妬み合い、仇のようであった。日蓮宗の寺では犬を飼っていて法然と名付けた。淨土宗の寺でも犬を飼っていて日蓮と呼んでいた。ある日、二匹が戦った。日蓮は、すぐに法然にかみ殺されてしまった。日蓮宗の寺は誇って言った。「我が家の犬にはうまい飯をたっぷり食わせている。かの駄犬がうちの唐狡狴の相手になるはずもない。」淨土宗の寺はこれを聞いて、笑って言った。「うちの日蓮には糞ばかり食^くわせていた。戦って死ぬのもっともなことだ。」

[注] 宗門争いをする両寺の負け惜しみ話。

20

昔一廟祝與人争田，久控於官。一日忽受斷，公然歸。眾問，如何。曰，今日與仇家對勘。我說得確然，辯如懸河。仇家俛首太息，不敢較一言。堂上堂下無不感嘆者。眾賀曰，然則田永為君家寶。祝掉頭，曰，否，否，於田蚤已為渠被奪了。聞者怪笑。（昔一廟祝人と田を争ひ，久しく官に控す。一日忽ち断を受け，公然として歸る。眾問ふ，「如何。」と。曰く，「今日仇家と對勘す。我說き得て確然として，辯ずること懸河の如し。仇家俛首太息し，敢へて一言も較せず。堂上堂下感嘆せざる者なし。」と。眾賀して曰く，「然らば則ち田は永く君の家の寶と為らん。祝は頭を掉ひて曰く，「否，否，田に於いては蚤^{はや}く已に渠^{かれ}が為に奪了せらる。」と。聞く者怪笑す。）

[訳] 昔，一人の神主が田を争って，長い間お上に訴えていた。ある日とつぜん判決を受けて，堂々と帰ってきた。皆は訊いた。「どうでしたか。」「今日は敵と対決してきました。私はしっかりと論を戦わせ，その弁は立て板に水のようにでした。敵は首を垂れ，ため息をつき，一言も抗論しようとしませんでした。奉行所のお上も見物人も誰一人感嘆しない者はいませんでした。」皆は祝って言った。「それでは，田んぼは長くあなたの家の宝物となることでしょう。」神主は頭を振って言った。「いやいや。田んぼのことでしたらとうの昔に相手の物となっております。」聞いている人々は苦笑した。

[注] 田争いに負けた廟祝の負けおしみ話である。

21

郷民有號六兵衛者。有人報，西郊有僵尸，其人名六兵衛。六兵衛愕然無語，逕趨而至彼，睹其面。大悅，曰，非我非我。（郷民に六兵衛と號する者有り。人有りて報ず，「西郊に僵尸有り。其の人，名は六兵衛。」と。六兵衛愕然として語無くして，逕ちに趨りて彼に至り，其の面を睹て，大いに悦びて曰く，「我に非ず，我に非ず。」と。）

[訳] 村人に六兵衛という名の者がいた。西の町に死人が出て，名は六兵衛だという情報もたらされた。六兵衛は驚いて言葉を失った。すぐさまそこに走って行き，死人の顔を見て大いに喜んだ。「私ではない，私ではない。」

[注] 自分と同名の者が死んだと聞き，自分が死んだかと不安に駆られ急ぎ死人を見に行く粗忽者の話で，類話に，『かす市頓作』「袈裟切にあぶなひ事」（宝永5年1708），『新話笑眉』巻五「五兵衛が安堵」（正徳2年1712），『軽口蓬莱山』「どふ合点したこれの八蔵」（享保18年1733），『夜明鳥』「片意地」（天明3年1783），『花間笑語』（文化5年1808），落語「粗忽長屋」がある。

22

有客訪主人者，時從雪中來。兩眸闇然，不見主人坐炕上。偶足觸一環，乃拾而懷之。既而旋明。見主人大愧。然無辭於出環。方局促間，俄又有一人入，曰，大闇。便出環授其人，曰，懷之即明。（客の主人を訪ふ者有り，時に雪中より來たり。兩眸闇然として，主人炕上に坐するを見ず。偶^{たまたま}足一環に觸り，乃ち拾ひてこれを懷^{ふところ}にす。既にして旋明^{やや}らかなり。主人を見て大いに愧づ。然れども環を出すに辭無し。方に局促の間，俄かに又一人有りて入りて，曰く，「大いに闇し。」と。便ち環を出して其の人に授けて曰く，「これを懷にすれば即ち明なり。」と。）

[訳] 主人を訪ねてきた客がいた。雪の降る中をやってきたので，両目はよく見えず，オンドルの上に主人が座っていることに気付かなかった。偶然，足に輪っかが触った。これを拾って懷の中に入れた。やや明るくなって，主人を見て大いに恥入った。しかし，輪っかを取り出すいい口実もない。にっちもさっちもいなくなっていると，また一人が入ってきて言った。「とても暗い。」そこですぐに輪っかを出して，その人に渡して言った。「これを懷に入れたら明るくなりますよ。」

[注] 暗順応でよく見えず誰も見ていないものと思って一環を失敬したものの，やがて目が慣れ，主人の存在に気づいて，その場をなんとか言い繕おうとする話で，類話に，『醒睡笑』『木樵の歌』（寛永5年1628），『軽口福德利』『ぬすみの当話』（宝暦3年1753），『高笑ひ』『新無間』（安永5年1776）がある。

23

京刹諸鍾，歲晚有議事，聚于毘盧殿畔。毘盧推窗瞰之，曰，筆頭菜早已茁歟。（京刹の諸鍾，歲晚に事を議すること有りて，毘盧^{かたわら}殿の畔^{あつ}に聚まる。毘盧，窗を推してこれを瞰して，曰く，「筆頭菜早くも已に茁するか。」と。）

[訳] 京の寺の多くの鐘が年の暮れに相談ごとがあつて，毘盧殿のかたわらに集まった。毘盧が窓を開けて，（集う）鐘を見降ろして言った。「つくしが早くももう芽を出したのだなあ。」

[注] 鐘をつくしに見立てた話である。

24

北方極寒之地，冬月雪積數丈，人如蛇虫之蟄也。其與鄰人語，輒用長筒。然聲多冰於筒中，得達者不過十之一二。次年，以筒曝春陽，則千談萬語遽沸騰。其喧嚷不可言也。又撒尿即凍做冰柱。故手持木槌以碎之。（北方極寒の地，冬月雪積もること數丈，人，蛇虫の蟄するが如し。其の鄰人と語るに，輒ち長筒を用ふ。然れども聲多く筒中に冰り，達することを得る者十の一，二に過ぎず。次年，筒を以て春陽に曝さば，則ち千談萬語^{にわ}遽かに沸騰し，其の喧嚷言ふべからざるなり。又尿を撒ずれば即ち凍りて冰柱と做る。故に手に木槌を持ちて以てこれを碎く。）

[訳] 北国の極寒の地では、冬には雪が数丈も積もる。人は蛇や虫が冬眠するかのようである。隣人と話す時には、長い筒を用いる。しかし、声の多くは筒の中で凍ってしまい、伝わってくる言葉は十のうち一つ、二つに過ぎない。次の年、春のうららかな陽に筒を晒すと、多くの言葉が急に湧き出る。そのうるさいことといたら、ことばにできないほどだ。また小便をしようと、すぐに凍って氷柱となってしまふので、手に木槌を持ってこれを砕く。

[注] あり得そうであり得ない寒国の大話で、類話に、『ただとる山のほととぎす』（成立年代不明）、『軽口大笑ひ』『寒国の大咄の事』（延宝8年1680）、『坐笑産』『寒国』（安永2年1773）、『虚言八百万八伝』（安永9年1780）、『詞葉の花』『寒国』（寛政7年1797）、『軽口臍宿替』（文化頃1800?）、『新古茶話雑談軽噺』『寒国』（文化頃1800?）、『百歌撰』下「うそつき弥次郎」（天保5年1834）、落語「弥次郎」がある。

25

或人以一蔦囊視眾，曰，此巴女辨慶二人戰袍，以其殘錦所製。僉曰，希罕物也。君準楊妃錦襪之例，請觀者輒取百錢。又問，君家歷世所什襲乎。曰，否，近於賣偶店得焉。聞者絕倒。（或人一蔦囊を以て，眾に視せて，曰く、「これ巴女辨慶二人の戦袍，其の殘錦を以て製する所なり。」と。僉曰く、「希罕の物なり。君，楊妃錦襪の例に準じ，請ひ觀る者には輒ち百錢を取れ。」と。又問ふ，「君が家歴世の什襲する所か。」と。曰く，「否な，近ごろ賣偶店にてこれを得たり。」と。聞く者絶倒す。）

[訳] ある人が古びた袋を、大勢の人に見せて言った。「これは巴御前と弁慶の二人の戦袍の残りの布で作ったものだ。」皆は言った。「珍しいものだ。楊貴妃の錦の羽衣の例にならって、見たいという者には百錢を取って見せたらいい。」また訊いて言った。「あなたの家に代々秘蔵されていたものか。」「いや。近頃、人形店で買ったものだ。」聞いていた人々は笑い転げた。

[注] 根拠のない大話で、類話に、『鹿の子餅』『煙草入れ』（明和9年（安永元年）1772）、『再成餅』『開帳』（安永2年1773）がある。

26

二郷人遊攝都。見有擔水賣之者。甲曰，此地富饒，水獨為錢。乙曰，不然，無錢水亦不易飲。（二郷人，攝都に遊ぶ。水を擔ひてこれを賣る者有るを見る。甲の曰く，「此の地富饒，水獨り錢と為る。」と。乙の曰く，「然らず，錢無くんば水亦飲むに易からず。」と。）

[訳] 二人の田舎者が大阪に物見遊山に出かけた。水を担いで売っている者を見た。甲が言った。「この地は豊かだから、水だけでも錢になるなあ。」乙は言った。「そうではない。錢がなければ水も簡単には飲めないのさ。」

[注] 納得できる理屈話である。

27

吉原妓女寫情書，劈牋不須剪。以臙脂水塗而裂之。嫖客得之，悅曰，美人以舌為刀，是其唇紅所染也。秘之枕箱，不殊洪璧而已。其輕薄可笑也。嘗有十人爭一妓，各受妓盟文。後僉知之，怒其侮弄。同會于妓家面質。妓曰，此中真盟者，止有一紙耳。客曰，願聞之。若夫劓誓，則投諸火中。妓曰，姑置之。他日私向其人白之。客環詰數四，妓卒不言。於此各懷盟書而歸，可謂醒世談而已。（吉原の妓女，情書を寫して，牋を劈くに剪を須ゐず。臙脂の水を以て塗りこれを裂く。嫖客これを得て，悦びて曰く，「美人舌を以て刀と為す。これ其の唇紅の染めし所なり」と。これを枕箱に秘し，殊に洪璧のみならずとす。其の輕薄笑ふべきなり。嘗て十人有りて一妓を争ふ。各妓の盟文を受く。後，僉これを知りて，其の侮弄を怒る。同に妓家に會して面質す。妓の曰く，「この中，真の盟なるは，止だ一紙有るのみ。」と。客の曰く，「願はくはこれを聞かん。若しそれ劓誓ならば則ち諸れを火中に投ぜん。」と。妓の曰く，「しばらくこれを置け。他日私かに其の人に向かひてこれを白さん。」と。客，環詰數四するも，妓，卒に言わず。ここに於いて各盟書を懷して歸る。醒世の談と謂ふべきのみ。）

[訳] 吉原の妓女は起請文を書いて，便箋を割くとき鋏を用いずに，紅おしろいの水を塗って裂く。嫖客はこの文を手にして喜んだ。「美人は舌を刀としている。これは唇の紅の痕だ。」その文を枕の箱に隠し，珠玉同様の珍重ぶりである。その輕薄さは笑うべきだろう。かつて十人の男がいて一人の妓女を争った。各々その妓女の起請文を受け取った。後になって，皆がそれを知って，侮弄されたことに腹を立てた。皆で妓楼に集まり，本人に問いただした。妓女は言った。「この中に真の起請文が一通ございます。」客は言った。「どうかそれを教えてくれ。もしにせの起請文であれば，これを火の中に投じよう。」妓女は言った。「しばらくお待ちください。後日，密かにその方に申し上げますから。」客は妓女をとり囲んで何度も詰問したが，妓女はとうとう口を割らなかつた。そこで各々，その起請文を懷に入れて帰った。目を覚まさせられる話とってよいだろう。

[注] 現実でありそうな嫖客の愚か話で，類話に、『善譚随訳』（安永4年1775），落語「三枚起請」がある。

28

有一奇士，欲為人之所不能為。常言，終南進士掣鬼物，未足為神。一日，雷震於門前。紫煙黑絮之中，電火四射。奇士踏烟入之，忽挾雷公出，快閉諸一室。少間，雲霧霧開。悄悄啟戶視之，則闖然一盲嫗，悲涕拜跪，曰，吾是下界人，萬乞雷公寬恕早放，令得還塵間。（一奇士有りて，人の為す能はざる所を為さんと欲す。常に言ふ，「終南の進士鬼物を掣するも，未だ神と為るに足らず」と。一日，雷，門前に震す。紫煙黑絮の中，電火四射す。奇士烟を踏みてこれに入り，忽ち雷公を挾みて出で，快ぎ諸を一室に閉す。少間あつて，雲霧れ霧開く。悄悄として戸を啟

きてこれを視れば、則ち闐然たる一盲嫗、悲涕拜跪して曰く、「吾はこれ下界の人、萬に乞ふ、雷公寛恕して早く放ちて、塵間に還ることを得せしめよ。」と。）

[訳] ある奇人がいて、他人が出来ないことをしたいと思っていた。つねづね「終南山の進士（鐘馗）は化け物を制したが、神となるには不十分だ。」と言っていた。ある日、雷が門前で鳴りひびき、朦朧とした暗闇の中に、稲光が四方から射した。その奇人は、その稲光をもろともせずその中に入ると、すぐさま雷神を挟んで出てきて、いそいでこれを部屋の中に閉じ込めた。ややあって、雲ははれ、霧は消えた。そつと戸を開けて中を覗いた。なんと頭を出した盲嫗が、涙しながら跪き拜んで言った。「私は下界の者でございます。どうか、雷公様、お許しくださって、早く人の世に帰してください。」

[注] 終南進士は唐の鐘馗のこと。奇人と盲嫗の両者の勘違い話である。

29

泉州石津蛭子神，異靈顯赫。廟祝昇之來於京師，啟龕縱拜。有貧者。祈欲得財。夢神告，曰，我亦匱此物，是以遠來募化。何暇拯汝。（泉州石津蛭子神，異靈顯赫たり。廟祝これを^{かつ}昇げて京師に來たりて，龕を放きて縱拜せしむ。貧する者有り。祈りて財を得んと欲す。夢に神あり告げて，曰く，「我も亦この物に^{とぼ}匱し，これを以て遠く來たりて募化す。何の暇ありてか汝を拯はん。」と。）

[訳] 泉州の石津神社の恵比寿神は靈驗あらたかであった。神主は神を担いで京都に来て、厨子を開帳した。貧乏な者がいて、金が手に入るようにと祈った。夢に神が現れて言った。「私もまた金に困っている。それゆえに遠くから来て勧進しているのだ。どうしてお前を救う余裕などあろうか。」

[注] 現実でありそうな貧乏話で、類話に、『軽口浮瓢筆』「福いのり」（寛延4年1751）がある。

30

有秀才慕一姫，屢寄情書。而事久不諧。友人嘲笑之。秀才曰，已勾了一半矣。曰，願聞其說。曰，我有情，女無情，非勾了一半耶。（秀才有りて一姫を慕ひ，屢情書を寄す。而して事久しく諧はず。友人これを嘲笑す。秀才曰く，「すでに一半を勾了す。」と。曰く，「願はくば其の說を聞かん。」と。曰く，「我に情有りて，女に情無し，一半を勾了するに非ずや。」と。）

[訳] 娘を慕うある秀才が、しばしば恋文を寄せていた。しかし、思いは長い間叶わなかった。友人はこのことを嘲り笑った。秀才は言った。「すでにもう半分がなくなりましたよ。」「その理由を聞かせてくれ。」「私に情があり、娘には情がない。これで半分がなくなつたといえるでしょう。」

[注] もてない男の独りよがりの話で、類話に、『花笑顔』「娘」（安永4年1775）がある。

31

有以糞易茄子者，鄰舍翁駁之，曰，茄子雖美也，糞以易之。乃是穢物，不可食。不若賣而取錢也。其人笑曰，其錢何所用。不買食物何也。翁曰，吾則不然。積而至六七百文，常以買禪而已。（糞を以て茄子に易ふ者有りて，鄰舍翁これを駁して，曰く，「茄子美なりと雖も糞を以てこれに易ふ。乃ちこれ穢物，食ふべからず。若かず，賣りて錢を取るには。」と。其の人笑ひて曰く，「其の錢は何の用ふる所ぞ。食物を買はずして何ぞや。」と。翁曰く，「吾は則ち然らず。積みて六七百文に至れば，常に以て禪を買ふのみ。」と。）

[訳] 下肥を売って茄子に代える者がいた。隣家の翁がこれを非難して言った。「茄子は美味いといっても，下肥を売って茄子に換えたのだから茄子はけがれた物だ。食べてはいけない。売って錢にするにしくはない。」その人は笑って言った。「その錢は何に用いるのか。食べ物を買わないでどうするのか。」翁は言った。「私はそうはしない，貯めて六，七百文になったらそれでいつも禪を買う。」

[注] 「下肥を売った金は下の用に用いる」というへ理屈話である。

32

放蕩兒每夕出遊。其父呵責之。兒曰，朋友邀飲。金石之交不可違也。父怒，曰，父母與友孰重。汝唯友言是聆。若俾喫火亦喫之乎。曰，喫之。父益怒，呼僕盛火于銅盆，以置兒前。兒曰，願和醬油喫之。（放蕩兒每夕に出て遊ぶ。其の父これを呵責す。兒の曰く，「朋友飲^{もと}を邀むる。金石の交わり違ふべからず。」と。父怒りて曰く，「父母と友と孰^{いづ}れか重^{なんじ}き。汝唯だ友の言のみこれ聆^きけり。若し火を喫せしむれども亦たこれを喫せんか。」と。曰く，「これを喫せん。」と。父^{ますます}益怒りて，僕を呼びて火を銅盆に盛りて，以て兒の前に置く。兒の曰く，「願はくは醬油に和してこれを喫せん。」と。）

[訳] だら息子が毎夜，遊びに出て行く。父はこれを厳しく諫めた。息子は言った。「友人が飲もうと誘うのです。金石の交わりに背くべきではありません。」父は怒って言った。「父母と友人とではどちらが大切か。お前は友人の言うことだけを聞く。もし火を食えと言われたら火を食らうのか。」「食べます。」父はますます怒り，下男を呼んで，火を銅盆に載せて，息子の前に置いた。息子は言った。「できれば醬油をかけて食べたいものです。」

[注] 親を食うふてぶてしい息子の話である。

33

有一人食鰯過度，腹脹而卒。忽見閻神。閻神檢簿，無罪過。因命吏送極樂國。其人赧赧不敢前。閻神笑，曰，呆漢子，極樂不願，欲何往邪。曰，欲登溷耳。（一人有りて鰯を食らふこと過度，腹脹して卒す。忽として閻神に見ゆ。閻神簿を檢すも，罪過無し。因りて吏に命じて極樂國に

送らしむ。其の人赳赳して敢へて前^{すす}まず。閻神笑ひて曰く、「呆漢子、極樂を願はざれば、何くに往かんと欲するや。」と。曰く、「溷に登らんと欲するのみ。」と。

[訳] ある人が鳥^{イカ}賊を食べ過ぎて、腹が張って死んでしまった。まもなく閻魔にまみえた。閻魔は帳簿を調べたが罪過はない。そこで役人に命じて、極楽国に送らせようとした。しかし、その人はもじもじして前に進もうとはしない。閻魔は笑って言った。「愚か者め、極樂を望まないで、どこに行きたいというのか。」「ただ厠に行くことを願うのみでございます。」

[注] イカを食いすぎて死んでしまった男が、閻魔に裁かれた時、満腹のあまり切羽詰まって、地獄よりも厠に行きたいと願い出る愚か話で、類話に、『蝶夫婦』『大食の後悔』（安永6年1777）（改題本として『話句翁』（天明3年1783））、『笑の友』『およバざる』（享和元年1801）がある。

34

六波羅洪水、鎌倉大火。兩使相遇于道。即醜。邦人謂水滅火聲曰醜。（六波羅の洪水、鎌倉の大火。兩使道に相ひ遇ふ。即ち醜と。邦人水もて火を滅する聲を謂ひて醜と曰ふ。）

[訳] 六波羅の洪水と鎌倉の大火が起こった。二人の使節が道で出会って「じゅう」と。日本では水で火を消す音を「じゅう」という。

[注] 「火に水でじゅうと消える」ということばあそびで、類話に、『軽口片類笑』『其筈の事』（明和5年1768）、『口拍子』『飛脚』（安永2年1773）がある。

35

客坐樓上、婢送茶至。客曰、這裡寒氣砭骨。婢曰、以風從地下來也。客曰、去梯、去梯。（客樓上に坐り、婢、茶を送りて至る。客の曰く、「這の裡寒氣骨に砭す。」と。婢の曰く、「風の地下より來たるを以てなり。」と。客の曰く、「梯を去れ、梯を去れ。」と。）

[訳] 客が楼閣の階上に座っていた。下女が茶を入れて持ってきた。客は言った。「この中は寒さが骨身に応える。」下女は言った。「風が一階から吹いてくるからです。」客は言った。「梯子をとり去れ、梯子をとり去れ。」

[注] 梯子をとれば風は来ないというナンセンス話で、類話に、『軽口初笑』『大物ははつり取り』（享保11年1726）、『軽口はなしとり』『かぜのぎんミ』（享保12年1727）、『楽牽頭』『真裸』（明和9年1772）がある。

36

某翁、有好妻醜妾。人問、曰、院君與側室姿狀天淵、以余視之、如月與團魚、若何。翁曰、誠如子言。雖然、論其味則不若團魚。（某翁、好妻醜妾有り。人問ひて、曰く、「院君と側室と姿

狀天淵，余を以てこれを視れば，月と團魚との如し，^{いかん}若何。」と。翁の曰く，「誠に子が言の如し。然りと雖も，其の味を論ずれば則ち團魚に若かず。」と。）

[訳] ある翁に美人の妻と醜い妾がいた。ある人が質問した。「あなたのご正妻とお妾のお姿には相当の開きがあります。私が見ますに月とすっぽんのようなのですが，如何ですか。」翁は言った。「まったくあなた様の言う通りでございます。しかし，その味について論じれば，すっぽんには及びません。」

[注] 「月とすっぽん」の「すっぽん」と食べ物物の「すっぽん」をかけたことばあそびの話である。田辺貞之助¹⁰によれば，類話として，江戸の小咄「蓼食う虫」があるようであるが，原典は未見である。

37

野猪穿籬入，而糞於花壇。主人怒而呼僕曰，鹿也撒了馬糞。該殺之，取熊膽。(野猪籬を穿ちて入り，花壇に糞す。主人怒りて僕を呼びて曰く，「鹿なるも馬糞を撒了す。これを殺して熊膽を取るべし。」と。)

[訳] 野猪がまがきに穴を開けて入り込み，花壇に糞をした。主人は怒って下男を呼んで言った。「鹿のくせに馬糞を撒き散らしていった。こいつを殺して熊胆を取らなければならん。」

[注] 野猪を「鹿」と呼び，その糞を「馬糞」と称し，胆を「熊膽」と呼ぶ男。巷間で「馬糞」，「熊膽」と日常頻繁に用いるその動物特有の名詞を動物一般に通用する名詞とかんちがいして用いるナンセンス話で，類話に，『初音草嘶大鑑』「牡丹ハ子細の種」(元禄11年1698)，『聞童子』「胆」(安永4年1775)，『花顔笑』「間ちがひ」(安永4年1775)，『喜美賀楽寿』「馬糞」(安永6年1777)，『新製欣々雅話』「別業」(寛政11年1799)，落語「粗忽長屋」がある。

38

或曰，吾有捕雀術。朱以塗掌，墨以塗腕，置米于掌上，戸鑿一孔，以出之。雀意是飯匙，來啄。乃捕之。又有串鴿做數珠法。鴿性嗜豆。今給之以巴豆，穿諸線端，以置於牆下。鴿念是豆，乃吞之。一瀉而死。他鴿又如之。輒一線百鴿，該頃刻就串了。(或るひと曰く，「吾に雀を捕る術有り。朱を以て掌に塗り，墨を以て腕に塗り，米を掌上に置き，戸に一孔を鑿ちて，以てこれを出す。雀これ飯匙^{おも}と意ひ，來りて啄む。乃ちこれを捕らふ。又鴿を串して數珠と做す法有り。鴿の性豆を嗜む。今これを給む^{あざ}くに巴豆を以てし，これを線端^{つらぬ}に穿き，以て牆下に置く。鴿これ豆と念ひ，乃ちこれを吞む。一瀉して死す。他の鴿も又かくの如し。輒ち一線に百鴿頃刻にして就ち串了すべし。」と。)

10 田辺貞之助 『新訳江戸小咄大観』(青蛙房 1960) 参照。

[訳] ある人が言った。「私には雀を捕える方法がある。掌に朱を塗りこんで、腕に墨を塗り、米を掌の上に置き、戸に一つの穴を開けて、そこから腕をさし出す。雀はそれをしゃもじと思いで込んで寄ってきて啄むはずだ。そこで雀を捕まえるのだ。また、鳩を串刺しにして数珠つなぎにする方法がある。鳩は豆を好んで食べる。今、巴豆を豆と偽って数珠つなぎにして、まがきの下に置く。鳩はこれを豆だと思い、のみこんで、下して死ぬ。他の鳩も同じようにする。そうすれば一列に並んだ巴豆で百羽の鳩をたちどころに串刺しにできるはずだ。」

[注] 巴豆は毒性が強く、峻下剤としても用いる。現実にはありそうな大話で、類話に、『宇喜蔵主古今咄揃巻一』「雀捕りやうの事」(延宝6年1678)、『にがわらひ』「山雀をだます事」(延宝7年1679)、『訳準開口新語』(寛延4年1751)、『鳩灌雑話』「(三) 鷺」(寛政7年1795)、『善謔随訳續編』(寛政10年1798)、『花間笑語』(文化5年1808)がある。

39

一士人夜讀。聞偷兒穴墻聲。潛伏戸下伺之。及墻既穿偷兒探手入。士暴捉其手、喝曰、何人、暴掠如之。偷兒曰、咱親故皆貴顯、非無糊口計。然不能舐痔、吮癰。落魄至此。願賜憐宥。士曰、爾左矣。巧言令色、雖君子愧之、亦救生一術也。孰與懸軀於嶮巖天。因以百錢置其掌、曰、去々、莫復踏故轍。偷兒曰、鮮矣仁。此話雖先輩已録、予亦試書。(一士人夜讀す。偷兒墻に穴する聲を聞く。潛みて戸下に伏してこれを伺ふ。墻既に穿つに及びて偷兒手を探りて入る。士暴に其の手を捉へて、喝して曰く、「何人ぞ、暴掠することかくの如し」と。偷兒の曰く、「咱が親故は皆貴顯にして、糊口の計無きに非ず。然れども痔を舐り、癰を吮ふこと能はず。落魄ここに至る。願はくは憐宥を賜はんことを。」と。士曰く、「爾左れり。巧言令色、君子これを愧づと雖もまた生を救ふの一術なり。軀を嶮巖の天に懸くるはいずれぞ。」と。困りて百錢を以て其の掌に置きて曰く、「去れ去れ、復た故轍を踏むこと莫かれ。」と。偷兒の曰く、「鮮きかな仁。」と。この話、先輩已に録すと雖も、予も亦試みに書す。)

[訳] ある武士が夜に本を読んでいると、盗人がまがきに穴をあけている音が聞こえた。こっそりと戸の下に伏せてこれを窺った。まがきに穴が開くと盗人は手探りで入ってきた。武士は忽ちその手を捕まえて一喝した。「誰だ。他人のものをかすめ取ろうとは。」盗人は言った。「私の親戚や知人はみな身分が高く、生計を立てる手段がないわけではありません。しかし、痔を舐め、できものを吸うように人にこびるまねはできず、ここまで落ちぶれてしまいました。どうか、寛大なお心でお許してください。」武士は言った。「お前は間違っている。巧言令色は君子の恥すべきことだが、生きるための手立てでもある。険しい道はいずれであろうか。」そこで百錢を掌の上に置いて言った。「去れ去れ。もう二度とやってはならぬ。」盗人は言った。「巧言令色、鮮きかな仁。」この話は先達がすでに(笑話本に)収録しているが、私もまた試しに書く。

[注] 『論語』「学而篇」の「巧言令色鮮矣仁」を用いた吝ばなしで、類話に、『軽口浮瓢筆』「盗

人に銭」(寛延4年1751),『善謔随訳』(安永4年1775),『聞童子』「学者」(安永4年1775),『笑堂福聚』(享和4年1804)がある。

40

有拾百錢於道者, 歸語妻兒, 曰, 是徵吾壽至期頤。可謂大幸也。兒笑, 曰, 父朝不謀夕。諺云, 百錢如夢。謂其易盡也。母怒, 曰, 萬錢難買者為兩親。鼠兒調弄乃翁。大是不孝。兒曰, 孀言諒然。雖然, 今欲賣之, 孰肯買之者。得非以父母驕其子邪。(百錢を道に拾ふ者有りて, 歸りて妻兒に語りて, 曰く, 「これ吾が壽の期頤に至るを徵す。大幸と謂ふべきなり」と。兒笑ひて, 曰く, 「父朝に夕を謀らず。諺に云ふ, 百錢夢の如しと。其の盡き易しを謂ふなり」と。母怒りて, 曰く, 「萬錢買ひ難き者は兩親と為す。鼠兒乃翁を調弄す。大いに是れ不孝」と。兒曰く, 「孀が言諒まことに然り。然ると雖も, 今これを賣らんと欲す。孰れか肯へてこれを買ふ者ぞ。父母たるを以て其の子に驕るに非ざることを得んや」と。)

[訳] 道で百錢を拾った人がいた。帰って妻子に語った。「これは私の長寿の兆しであり, 百歳まで長生きするという証した。大いに喜ばしいことだ。」子は笑って言った。「一寸先は闇です。諺で百錢は夢のようだというのは, その尽きて無くなりやすいことを言うのです。」母は怒って言った。「万錢でも買うことが出来ないものが二親です。この餓鬼は自分の父をあざける。なんという親不孝もの。」子は言った。「母さんの言葉は本当にその通りです。そうは言っても, 今, (二親を) 売ろうとして, 一体誰が買ってくれるというのですか。父母であるからといって子どもに威張らずにはおれないのですか。」

[注] 子のへ理屈ばなしで, 類話に, 『軽口片頬笑』「親のうりかい」(明和5年1768), 『飛談語』「異見」(安永2年1773), 『花笑顔』「異見」(安永4年1775), 『聞童子』「異見」(安永4年1775)がある。

41

諸生聚談。一人曰, 近我讀左傳, 頗通其義。又一人曰, 我能讀右傳, 備之左傳何足言。各訝而問其書, 則大學右傳一章也。(諸生聚談す。一人の曰く, 「近ごろ我左傳を讀みて, 頗る其の義に通ず。」と。又一人の曰く, 「我能く右傳を讀む, 備の左傳何ぞ言ふに足らん。」と。おのおの各訝りて, 其の書を問へば, 則ち大學右傳みぎの一章なり。)

[訳] 多くの学生が集まって話している。一人が言った。「今, 私は左伝を学んで, ずいぶんその義に通じました。」また一人が言った。「私は右伝を読んでいます。あなたの左伝など言うに足りましようか。」皆あやしんで, その書について尋ねたところ, 『大学』にみえる「右, 伝の一章」という一句のことであった。

[注] 『左伝』(『春秋左氏伝』)は中国の史書の代表作の一つ。「右伝」は朱熹『大学章句』の章

のくぎりに見える「右、伝の～章」というきまり文句の「右、伝」の二字にすぎない。『左伝』さえ知らない人間が、見栄をはり恥をかく愚かばなしである。

五、「困譚」の特徴

先述のように、漢文笑話は江戸の中期以降、漢学者の間で、漢文階梯の名目の下に幾つも編まれた。漢文笑話の祖『訳準開口新語』（1751＝寛延4年）から、江戸小咄の隆盛を経て「困譚」に至るまで18の作品集が知られている。それらを比べてみると、「困譚」は、『訳準開口新語』にみえる硬さがなく、『善謔随訳』にある助辞使いの誤用や教訓性は少なく、『笑堂福聚』に多い風刺性は希薄となり、読後にはある種の「さわやかな」笑いが残る、といえる。その理由はなぜであろうか。

織田正吉は、『笑いとユーモア』¹¹のなかで、「笑いを起こす人物」、「笑いを起こす言動、状況」という視点を提示し、「笑いを起こす人物」の要因を①知能的な欠陥、②性格的、道徳的欠陥、③言動の過失、④職業、社会的地位の制約、⑤肉体的欠陥の五つに分類しているが、小論も、この「笑いを起こす人物」の視点を援用して本作品のもつ「さわやかな笑い」について見てみよう。

そもそも、江戸の小咄は、愚かさや視覚障害など知能的、肉体的欠陥を題材とする笑い、すなわち今日ではポリティカルコレクトネスに抵触する話題さえ笑いの対象とすることは少なかつた。しかし、「困譚」では、①知能的欠陥のある人物、⑤肉体的欠陥を持つ人物が「笑いを起こす人物」となることは案外少ないことに気付く。わずかに第9話の「盲人となっても糊計あり」に、視力が落ちた人物の話が登場するぐらいである。また、江戸小咄や中国の「笑府」などには、医者、僧侶、儒者などが笑いの対象となることが往々みられる（④職業、社会的地位の制約）が、本作品集にはこれも極めて少ない。「困譚」の笑いは、むしろ、体の欠陥や職業、社会的地位に特定されない人物が笑いを起こすことが大半で、いわば、「誰もが思い当たる笑い」に傾いているように思える。その意味では、寺崎蛸洲という作者が世間的価値観に縛られず、純粋な笑いへの興味、あるいは言葉への興味を抱いていた人物であったと考えられる。

また、その笑いには、艶笑ものがほとんどないことも指摘できる。第4話は「総嫁」の話であるが、それでさえ、本来人を欺くと考えられていた総嫁が、春を求めに来た狡猾な男に誠実さを覚え、却って騙されるという話であり、日常の生活の中でつい騙されてしまう、そんな人間の愚かしささえ感じさせられるものとなっている。第27話「吉原の妓女」も、嫖客たちが、妓女の書いた偽の起請文に騙される話ではあるが、騙すのは妓女の常套であり、騙される嫖客が愚かなだけ、という話であり、決して艶笑ものではない。

11 織田正吉著『笑いとユーモア』（筑摩書房 1986年5月27日）

更に、人間心理の機微を誇張して笑いとしたものが多いのも本笑話集の特徴である。たとえば、第1話の地元・富山の人間が上京した折、江戸の両国橋でかつての飲み友達に会う話がそうである。その友達は旧交を温めるにも酒代はない。そこで、すべなく、自らが描いた絵を売れたことと仮定して、馳走すべき金額分の絵を川に投げ捨てて寸志を表した。片や、それを目にした側は感極まって剣を抜いて乱舞し、酩酊の態を示して誠意に応えるというもので、見立てによる心情誇張の話として、躍動感と臨場感に溢れた一話となっている。第22話もそうである。これは、他人が見ていないものと思い、ちゃっかりとうまい汁を吸ったつもりだったが、他人に見られていたことが分かった瞬間のバツの悪さを簡練な文で見事に記している。

一方、作者がナンセンスや駄洒落に関心があったことも指摘できよう。第13話の、「胴切り」された身体が、それぞれ文を交わす話。第15話の、逃げそこないの泥棒が梁にぶら下がり「私は干し菜」と声を発する話などのおよそ現実にありえない話、第35話の、梯子を取ってしまえば下から風は伝わってこないという話などの採録がそれを示す。また第34話「ジュー」のようなことば遊びによるナンセンスな笑いの収録は駄洒落への興味の表れと言える。

加えて、理屈に適っていそうで実際は荒唐無稽な大話も少なくない。例えば、第24話「寒国話」であり、第38話「雀捕り・鳩捕り」などである。

このように、知能的・肉体的欠陥を題材とする笑いや身分話、艶笑話が少ないこと、そして人間心理の機微を誇張した話や、大話・ナンセンス・駄洒落などの多用による笑いが多いことから、作者の笑いの志向が極めて純粋なものであることがうかがえる。読後に残る、ある種の「さわやかな」笑いは、その純粋な志向によってもたらされたものかもしれない。

それでは、これらの話は作者の独創に拠るものであろうか。未だ類話を見つけることが出来ずにいるものが三分の一ほどあるが、その中には中国の古典の一文や典故のある言葉を落ちとする笑話が五話（第2話、第3話、第6話、第39話、第41話など）ほどあり、これらは多分作者の独創になると思われる。この古典の一文を用いるという手法は中国・日本の笑話でよく用いられ、漢文笑話の嚆矢である『訳準開口新語』においても特徴的笑話作法の一つであった¹²。古典に精通すれば、その名句を用いてみたくなるのは自然なことである。しかし、古典の一句を「落ち」とする作法以外で、明らかに独創になると断定できる作品は少ない。多くは、既に各話の末尾に示したように、それ以前の小咄を漢文に訳したものであると言える。では、作者はいずれの咄本に依ったのか。次章にて、「困譚」に影響を与えた咄本について検討を加えたい。

12 磯部祐子「漢文笑話『訳準開口新語』について」（『富山大学人文学部紀要』第53号 2010）

六、「困譚」に影響を与えた作品

「困譚」執筆に影響を与えた咄本の一つとして、まず、『軽口浮瓢筆』を挙げることができる。『軽口浮瓢筆』に収められている話に類する話は、第1話、第17話、第29話、第39話の4つである。第1話には、『軽口浮瓢筆』のほかに『善謔随訳』にも類話があるものの、前者に依拠して漢文化したと思われる。それは、「江戸の橋上」及び笑いが展開される場所設定などに、あきらかな共通性を見出すことができるからである。以下に第1話の類話二つを挙げる。

『軽口浮瓢筆』「ほうらく酒」¹³

身代を酒に飲つぶしたる男、江戸へ行て、ほうらくを荷ひ売して渡世を送り居たる折から、以前の酒友達、是も家財を飲あげて、江戸へかせぎにくだりしが、日本橋のつめにて行あひ、是ハ〜めづらしやと、互に飲あひしむかしを語りあふ咄の内より、彼ほうらく屋、ほうらくを三枚取て地に打つけ、微塵になしていふやう、貴様に酒をふるまハんと思へ共、折節売溜の錢なし。此ほうらく一枚が拾弍文づゝなり。三枚にて三拾六文が酒をふるまふ心にて打破たりといへば、扱〜昔わすれぬ心ざし、千万忝しといふより早く、脇指をするりとぬきてふりまハし、酔狂の心じやといふた。

『善謔随訳』¹⁴

寒門有客。主人曰、衡門之下辱高軒過臨、而貧窶不能以治具。斯行潦之水酌以當酒。敢請、為飲之。客乃強傾三大巨羅、而忽起拔劍擊柱。主人大驚曰、客胡狂。曰、非敢狂、亦以少醉態耳。(寒門客有り。主人の曰く、衡門の高軒過臨を下辱す、而して貧窶にして以て具を治むること能はず。この行潦の水酌して以て酒に當つ。「敢へて請ふ、為めにこれを飲め」と。客乃ち強ひて三大巨羅を傾け、而して忽ち^た起ち劍を抜て柱を撃つ。主人大いに驚きて曰く、「客^{なん}胡ぞ狂するか」と。曰く、「敢て狂するに非ず、亦た以て少しく酔態を示すのみ」と。)

前者『軽口浮瓢筆』は酒で身代をつぶした男が江戸・日本橋で焙烙売りを行っている。そこへやはり酒で家財を失ったかつての飲み仲間がやって来る、しかし、焙烙売りは金がないので焙烙を割って思いを伝え、飲み仲間も酔態の振りで応えるという話である。「困譚」第1話はこれにヒントを得て、江戸両国橋で絵を売る貧しい身なり（「鳩顔鶉服」）の人物が同郷の一学生を見かけるといふ設定にしたと思われる。久闊を叙しても共に酒を飲む金がない絵かきは、絵六枚30銭分を川に捨てて「寸志を示し」た。一学生もその心情を推し量り、すぐさま「生感愴久くして」、「乱舞一廻し」、「故（ことさら）に酣状を打った」。「困譚」はこのような行動描写によって登場人物の内面を生き生きと描き、ややペースを含んだ笑いに仕立てている。対して、『善謔随訳』は、貧しい家に客が訪ねて来たが、振る舞うものは何もない。そこで、

13 前掲『噺本大系』第8巻所収

14 前掲『噺本大系』第20巻所収

主人は水を汲んで酒の代わりに差し出す。客は三杯飲むや、やおら立ち上がり剣を抜いて柱をたたき打つ。驚いた主人がそのわけを問えば酔態を模したのだという。三作品とも同様のモチーフではあるが、「江戸の橋上」という場面設定と路上商売の二点を取り上げただけでも、「困譚」が『軽口浮瓢筆』に依っていることは証明されよう。また作品の妙味についていえば、『善謔随訳』、『軽口浮瓢筆』両作品はいずれも「困譚」第1話には及ぶまい。

また、『軽口浮瓢筆』に依ったと思われる第29話は、貧乏な神様の話。神とは人々の富への希求を聞き入れる存在であるべきにもかかわらず、神とて貧に喘いでいて、人の願いを聞き入れる余裕はないという。この現実を、夢に神が立って告げるか（「困譚」）、神が夢現の際に告げるか（『軽口浮瓢筆』）の相違はあるものの、短文に込められた小気味よい笑いは両者に通じる。明らかに『軽口浮瓢筆』の次の一話に倣ったものであろう。以下にそれを掲げる。

『軽口浮瓢筆』「福いのり」¹⁵

泉州石津の糸びす、京にて開帳ありし時、まづしきもの、福をあたへ給へと、七日籠ていのりけるに、七日にあたる夜半の比、糸びす立出給ひ、汝、我にいの事深切なれば、福をあたへたく思へ共、汝にあたふべき福があれば、をれもはるゝの所へ開帳にハ来ぬと仰られた。

ところで、第1話と同様に、『軽口浮瓢筆』と『善謔随訳』の両方に類話があるものとして、第39話がある。両者を比較すれば、ここでも、やはり、「困譚」の表現は、『善謔随訳』よりは『軽口浮瓢筆』に近いことが窺える。以下に類話を掲げる。

『軽口浮瓢筆』「盗人に銭」

ある儒者の所へ盗人來り、壁の間より手をさし入レ、かけがねをはづさんとする所を、弟子衆見付けて、其手を捉まへ、釘にて打付んなんどゝひしめきければ、彼儒者、奥より立出、よしなき事をせらるゝなとて、銭百文を盗人の手ににぎらせ、かさねて來る事なかれとて手を放せば、盗人帰りさまに、鮮矣仁といふた。

『善謔随訳』

客告窮於主人而乞憐。數日未得焉。於是愈益促訾嘔。主人曰、如客所謂巧言令色。吾所不與者也。客曰、主人亦鮮矣仁。(客窮を主人に告げて憐みを乞ふ。數日未だ得ず。是に於いて愈益促訾嘔たり。主人曰く、「客の如きは所謂巧言令色なり。吾與せざる所の者なり。」客の曰く、「主人も亦た鮮きかな仁。」と。)

『軽口浮瓢筆』及び「困譚」両者には、壁から手を差出し百銭を渡すという場面設定の類似がある。「困譚」の作者は『軽口浮瓢筆』の話を目にしたであろう。しかし、同時に、第39話を作るにあたって、作者は先行する漢文笑話をより強く意識していたようである。「困譚」の第39話の下に、「此話、雖先輩已録、予亦試書」という割注がそれを示す。ここでいう先輩と

15 前掲『噺本大系』第8巻所収

は、作者が皆川淇園に学んだことを考えれば、『善謔随訳』（1775）の作者義端上人¹⁶ではなく、『笑堂福聚』（1804）の作者であり、皆川淇園らとゆかりの強い山本北山¹⁷（1752 - 1812）を指すと思われる。前掲の浩斎序文で見たように『笑堂福聚』を意識した一文があることもまたそれを裏付ける。その『笑堂福聚』では以下のように記される。

『笑堂福聚』¹⁸

館先生夜坐讀書，聞偷兒穴壁聲，潛起伺穴口。及壁既穿，偷兒先進手探內。先生急擒住其兩腕，教誨曰，余不忍拿汝送于官。應宥而還。然人之作生，捆履賣菜猶可糊數口。奈暗中白搶人貲財無黑報乎。天道明明莫可畏焉。余今以一點仁心與汝明日糧料。乃置百文錢於偷兒掌中。偷兒緊握之曰，鮮矣仁。（館先生夜坐して書を読み，偷兒の壁に穴する聲を聞き，潜かに起き穴口を伺ふ。壁既に穿つに及んで，偷兒先ず手を進めて内を探る。先生急に其の兩腕を擒住し，教誨して曰く，「余汝を^{とら}へて官に送るに忍びず。應に宥^{ゆる}して還すべし。然れども人の生を作すや，履^{たた}を捆き菜を賣りて猶ほ數口を糊すべし。奈ぞ暗中人の貲財を白搶して黒報無からんや。天道明明，これより畏るべき莫し。余，今一點の仁心を以て汝に明日の糧料を與へん」と。乃ち百文錢を偷兒の掌中に置く。偷兒これを緊握して曰く，「鮮きかな仁」と。）

二つの漢文による類話のうち、『善謔随訳』は、貧に窮した客が主人にへつらったので、主人が「お前は巧言令色だ」と批判するのに対し、客も「主人も鮮矣仁（これっぽっちの情けですか）」と言い返す単純な笑話である。一方、『笑堂福聚』は、静かに読書している儒者の家に盗人が忍び来るという状況描写に始まり、儒者が盗人を捕え教訓を垂れ百錢を与え帰そうとしたところで、盗人が「鮮矣仁」と切り返すややストーリー性を伴った笑話である。『笑堂福聚』の一話は、『軽口浮瓢筆』のそれに極めて類似し、『軽口浮瓢筆』を漢文化したものであることが推測される。上掲の三作品後に作られた「困譚」は、その状況描写において、『軽口瓢筆浮』よりは『笑堂福聚』に類似しているとみることができる。しかし、「困譚」には、籬の穴から突き出た盗人の手を掴んで「何人ぞ」と一喝する語、また百錢を与えた後は「去れ、去れ。復た故轍を踏む莫れ」と言い放つ語などによって、更に一層の臨場感が加わったといつてよい。加えて、用字面でも「舐痔吮癰（「莊子・列禦寇）」、「落魄至此」、「願賜憐宥」などの四字語の羅列によって、「困譚」は引き締まった笑話となっている。同時に、『笑堂福聚』にはない『論語』「鮮矣仁」の上の句である「巧言令色」を文中に埋めることに成功している。筆者の漢文素養の高さと文章を作る上での苦心が見て取れる。

16 義端上人については、石浜純太郎著『浪華儒林伝』（全国書房 1942）に「義端上人と旭千里」がある。また、水田紀久「釋義端雜考」（『近世日本漢文学史論考』汲古書院 1987）にはその詳細な伝記が記されている。

17 佐藤浩一「山本北山『笑堂福聚』について」（『日本漢文小説の世界—紹介と世界—』（日本漢文小説研究会 白帝社 2005））参照。

18 『漢文体笑話ほん六種』（近世風俗研究会 1973）所収。

ところで、『軽口浮瓢筆』であるが、これには宝暦元年初版のほか、安永2年版などの後刷り本が多く出ているようであり、案外手にしやすい軽口本であったため、蛸洲も容易に見ることができたと思われる。

また、複数の類話が収められている咄本として、『聞童子』（3話）、『醒睡笑』（3話）、『軽口はなしどり』（2話）、『楽牽頭』（2話）などもある。中でも、『軽口はなしどり』の作品と「困譚」の話は近似しているという印象を覚えるが、他の咄本については、蛸洲が直接目にしながら漢文化したと特定する根拠は希薄である。参考までに第5話の類話3つを以下に示す。『軽口はなしどり』のそれが「困譚」に最も類似していることは容易に理解できよう。

『軽口はなしどり』「とうふのかよひ」¹⁹

とうふをかふて、かよひをとうふのうへにのせてかへりける。とうふもかよひもおなじいかなれば、とうふかとおもひ、とんび、かよひをかけてとびゆきける。つかいのものかへりて、かよひをとんびにかけられました申ければ、だんな、ことのほか、きものつぶれたかほして、それハなんとしたものであると、いろ〜しあんして、いや〜、はやうとうふやへいてこい。なんと申てまいりましょ。しらぬとんびがかよひもつてきたと、とうふやつてたもんなどいふてこい。

『軽口福おかし』「焼鳥にへを」²⁰

長吉よ。とうふ取てこひといへば、あいと、ほんと通をもちて、とうふ二丁取、うへにかよひをおゝいてかへる。頓て鳶舞下り、かよひをつかみゆく。長吉ぬからんものにて、とうふやへ戻り、鳶が通持て来たと、とうふ渡してくださんなと云た。

『はなしの種』「とんびの通とり」²¹

これ、よし松どん。横町のとうふやへいて、油あげ五ツとつてきておくれ。ヘイ、かしこまりましたト、通持てとうふやへいて、かへり道、とんび、中ぞらより飛下り、あぶら上ゲ、通ひとも引さらへ、とび上りければ、由松、なく〜内へもどりければ、下女が、よし松どん。今までどこでひまを入れていゝたといへば、ヘイ。道でとんびに油あげをとられた。下女が、そふいふことなら、なんでぜうだんせずと、早ふもどらんのじやいなァいふたら、よし松ハぬからぬかほで、通ひも一しよにとられたゆへ、すぐにとうふやへいて、とんびが通ひでとりにきても、かならずわたしてくれなと、こたへておきました。

最後に、幾つかの先行する漢文笑話集所収の作品数話と同じテーマをもつ「困譚」作品を取り挙げ、「困譚」の特徴を更に明確にしたい。蛸洲は、それらの作品を意識しながら自らの独

19 前掲『噺本大系』第7巻所収

20 前掲『噺本大系』第8巻所収

21 前掲『噺本大系』第16巻所収

自性を出すべく創作していったと思われるのである。第38話はその格好の例である。これは、雀や鳩を捕獲する方法について妙案を披露する話であり、『訳準開口新語』（1751）、『善謔随訳続編』（1798）にも見える案である。『訳準開口新語』の話は、柿の葉に酒粕を乗せて酔わせて日干しにして柿の葉でつつみとるといふもの。また、『善謔随訳続編』は、鷺の様子を窺いながら欺いて捕えるといふもの。一方、「困譚」は手に墨を塗り米を置いておびき寄せ捕まえる話と猛毒をもつ巴豆^{はず}を豆に見せかけて飲み込ませ一網打尽にする話の二つを一つにしたものである。以下に先行する漢文笑話二つを掲げる。

『訳準開口新語』²²

有人。語友人曰、吾有捕雀之術。友人曰、可得聞乎。其人曰、此術在盛夏為尤妙。多列柿葉屋上、各以小石鎮之、盛糟葉上。雀來食之。既而爛醉、枕石而臥。驕陽赫乎雀為柿葉捲籠。乃用帚一拂。一舉可獲雀數斗。（人あり。友人に語つて曰く、「吾に雀を捕ふるの術あり」と。友人の曰く、「聞くことを得べきか」と。其の人の曰く、「此の術盛夏に在つて尤も妙と為す。多く柿葉を屋上に列べ、各小石を以てこれを鎮し、糟を葉上に盛る。雀來りてこれを食す。既にして爛醉し、石を枕にして臥す。驕陽赫として雀柿葉に捲籠せらる。乃ち帚を用ひて一拂す。一舉に雀數斗を獲べし」と。）

『善謔随訳續編』²³

或謂友人曰、吾有捕鷺術。友人曰、其術奈何。曰、先潛身於蘆中、大聲呼鷺。鷺顧而不見人則仍舊就喙。於是重大聲呼之。鷺復顧而不見人則躡步踏泥。如此者數次、至其不顧而漸出、稍小聲呼之、愈近愈低聲遂自後抱之。（或る人友人に謂ひて曰く、「吾に鷺を捕る術有り。」と。友人の曰く、「其の術は奈何。」と。曰く、「先づ身を蘆中に潛して、大聲にて鷺を呼ぶ。鷺顧みて人を見ざる時は則ち舊に仍りて喙に就く。ここに於いて重ねて大聲にてこれを呼ぶ。鷺復た顧みて人を見ざる時は則ち躡歩して泥を踏む。かくの如きこと數次、其の顧みざるに至りて漸く出でて、稍小聲にてこれを呼び、愈近づきて愈聲を低くし遂に後ろよりこれを抱く。」と。）

両者と比較すれば、「困譚」の文章が如何に簡練であるかを知ることができる。先行笑話を念頭に置いた上で、より短く、より練れた笑話を目指していったことが窺えよう。

因みに、巴豆との話として、『立春噺大集』に、蟒蛇に食われた医者が蟒蛇の腹の中で薬箱から巴豆と大黃を取り出すと蟒蛇の腹は下り、医者は一気に外に出されるという話がある。また、第39話の類話として、『花間笑語』（1808）にも「鷺取り」の話がある。後者は寛永3年（1791）に出版された「鳩灌雑話」に基づく話で、民話「カモトリごんべい」との類似性の強い作品であり、蛸洲がヒントを得た話ではあるまい。

22 前掲『噺本大系』第20巻所収

23 前掲『噺本大系』第20巻所収

七、おわりに

以上によって、「困譚」のもつ簡練な文章によるさわやかな笑いの世界を窺うことができた。この世界は、作者の漢文創作へのこだわりと洒脱な人柄によってもたらされたものであったろう。「困譚」のもつ簡練な文章は、上述第二章の碑銘に記された「少頃にして起き、朦朧^{もうろうげいご}嚙語、^{ねむ}睡り未だ醒めざる者に似たるも、これ其の詩を推敲せしなり」にみる作者の用字へのこだわりに通じ、さわやかな笑いは「其の身市井の人^た為るも、心は則ち飄然蟬脱として、山野の隱逸の如く、勢利紛華^{ごう}は毫も其の眸に挂けず。分に安んじ命を知り、頗る鼓腹擊壤の風有り。」の人生態度と符合する。寺崎蛸洲によって記された漢文笑話の世界に親近感を覚えずにはいれない。

なお、高岡市立図書館蔵の困譚草稿には、刊行された「困譚」41話以外に、更に10話ほどが収められている。虫食いがひどくその解説は容易ではないが、稿を改めて紹介したいと思う。

附：「困譚」と他の作品との関係一覧表

	困談作品	日本の類話	中国古典の引用文等
1	貧なれば自らの絵を丸めて寸志を表す	「軽口浮瓢筆・ほうらく酒」(1751寛延4) 「善謔随訳」(1775安永4)	
2	妓女に誘われ、他人に覚られぬふり	「善謔随訳」(1775安永4)	「我養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。」(『孟子』「公孫丑上」)
3	人は万物の霊なり(畜類にあらず)	未見	「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」(『書経』「泰誓上」)
4	一度の金で二度も総嫁と遊ぶ(数字の魔術)	参考：「訳準開口新語・壺算」(1751寛延4)	
5	通い牒もってきても蔦に豆腐を売るな	「軽口はなしとり・とうふのかよひ」(1727享保12) 「軽口福おかし・焼鳥にへを」(1740元文5) 「はなしの種・とんびの通とり」(1839天保10)	
6	螻蛄と蟻の戦いはしても、鉦鹿の大戦はしない	未見	螻蛄争蟻闘 鉦鹿大戦 (『史記』「秦始皇本紀」)
7	儉約指南	「当世軽口咄揃・しハき医者之事」(1679延宝7) 「立春嘶大集・しハん坊」(1776安永5) 「ふくら雀・儉約」(1789天明9) 「おとぎばなし・儉約」(1822文政5) 落語「始末の極意」	
8	運丁、雇い主が伯叔ならばよし	未見	
9	盲人となっても糊計あり	未見	
10	六角と八角	未見	
11	虱捕りの名人	未見	
12	乞食の貪欲	参考：能「張良」観世小次郎信光作	
13	胴切り(二つに斬られた身体、互いに文を交わす)	「軽口ひやう金房・火の見矢蔵之事」(元禄末頃) 「軽口あられ酒・けんくわどう切」(1705宝永2) 落語「胴斬り」(首提灯のまくら)	
14	力士の絵(力士の姿は牛の禪をするに似たり)	未見	
15	泥棒の言い訳	「醒睡笑・蜘蛛の真似して遊ぶ」(1628寛永5年) 「軽口花咲顔」「不功なぬす人」(1747延享4年) 「訳準開口新語」(1751寛延4年) 「聞上手三篇・泥坊」(1773安永2年)	
16	ムカデの行装	「前戯録・蜈蚣後期話」(1770明和7) 「楽牽頭・百足」(1772明和9) 「茶のこもち・百足」(1774安永3) 「売言葉・むかで」(1776安永5)	
17	いつまでも寝ていたし(邯鄲の夢)	「夜明鳥・邯鄲のまくら」(1783天明3) 「軽口浮瓢筆・邯鄲のまくら」(1751寛延4)	

	困談作品	日本の類話	中国古典の引用文等
18	大仏は大きい	「醒睡笑・大杓子は鬼の耳搔き」(1628寛永5) 「是楽物語」(1655～1661明暦年間～寛文初年) 「当世軽口咄揃・駕籠かきはまる事」(1679延宝7) 「当世手打笑・大仏にて太箸を拾ふ事」(1681延宝9) 「初音草嚙大鑑・恥をあらハす古脚布」(1698元禄11) 「坐笑産・大仏」(1773安永2) 「初登・大仏」(1776安永5) 「しみのすみか物語・餅を買て捨子を拾ふ男の事」(1805文化2)	
19	日蓮宗と浄土宗	未見	
20	土地争い	未見	
21	彼は我にあらず	「かす市頓作・袈裟切にあぶなひ事」(1708宝永5) 「新話笑眉・五兵衛が安堵」(1712正徳2) 「軽口蓬莱山・どふ合点したこれの八蔵」(1733享保18) 「夜明烏・片意地」(1783天明3) 「花間笑語」(1808文化5) 落語「粗忽長屋」	
22	拾って懐へ	「醒睡笑・木樵の歌」(1628寛永5) 「軽口福徳利・ぬすみの当話」(1753宝暦3) 「高笑ひ・新無間」(1776安永5)	
23	鐘は土筆に似たり	未見	
24	寒国話	「ただとる山のほととぎす」(成立年代不明) 「軽口大笑ひ・寒国の大咄の事」(1680延宝8) 「坐笑産・寒国」(1773安永2) 黄表紙「虚言八百万八伝」(1780安永9) 「詞葉の花・寒国」(1797寛政9) 「軽口臍宿替」(1800?文化頃) 「新古茶話雑談軽嚙・寒国」(1800?文化頃) 「百歌撰下・うそつき弥次郎」(1834天保5) 落語「弥次郎」	
25	希罕物	「鹿の子餅・煙草入れ」(1772明和9) 「再成餅・開帳」(1773安永2)	
26	水売りの理由	未見	
27	10枚の起請文	「善譚随訳」(1775安永4) 落語「三枚起請」	
28	一奇士 雷公を捕う	未見	
29	石津蛭子神も金が欲しい	「軽口浮瓢筆・福いのり」(1751寛延4)	
30	惚れたは半分叶ったり(負けおしみ)	「花笑顔・娘」(1775安永4)	
31	下肥えは下に用いよ(糞売りふんどしを買う)	未見	
32	親より友(火をも食べるか)	未見	
33	満腹	「蝶夫婦・大食の後悔」(1777安永6) 「改題本話句翁」1783天明3) 「笑の友・およばざる」(1801享和元)	

	困談作品	日本の類話	中国古典の引用文等
34	ジューと水（酒）かけ	「軽口片頬笑・其筈の事」（1768明和5） 「口拍子・飛脚」（1773安永2）	
35	風を防ぐに梯をとり去れ	「軽口初笑・大物ははつり取り」（1726享保11）「軽口はなしとり・かぜのぎんミ」（1727享保12）「楽牽頭・真裸」（1772明和9）	
36	月と鼈（女は顔より）	『新訳江戸小咄大観』（田辺貞之助 青蛙房, 1960）に「蓼食う虫」の一話があるが、原典は未見。	
37	間違い（動物の名）	「初音草嘶大鑑・牡丹ハ子細の種」（1698元禄11）「聞童子・胆」（1775安永4） 「花笑顔・間ちがひ」（1775安永4）「喜美賀楽寿・馬糞」（1777安永6）「新製欣々雅話・別業」（1799寛政11）落語「粗忽長屋」	
38	すずめ捕り	「宇喜蔵主古今咄揃巻一・雀捕りやうの事」（1678延宝6）「にがわらひ・山雀をだます事」（1679延宝7）「訳準開口新語」（1751寛延4）「鳩灌雑話・三・鷺」（1795寛政7）「善謔随譚続編」（1798寛政10） 「花間笑話」（1808文化5）	
39	盗児	「軽口浮瓢筆・盗人に銭」（1751寛延4） 「善謔随譚」（1775安永4）「聞童子・学者」（1775安永4） 「笑堂福聚・館先生」（1804享和4）	「巧言令色鮮矣仁」（『論語』）
40	親のうりかい	「軽口片頬笑・親のうりかい」（1768明和5） 「飛談語・異見」（1773安永2） 「花笑顔・異見」（1775安永4） 「聞童子・異見」（1775安永4）	
41	左伝と右伝		『左伝』と『大学』の一句

上記表の作成に当たっては、『江戸小咄辞典』（武藤禎夫編，東京堂出版，1965），『江戸小咄類話事典』（武藤禎夫編，東京堂出版，1996）から関連話を探し、『嘶本体系』（武藤禎夫・岡雅彦編，東京堂出版，1975～），『漢文体笑話ほん六種』（近世風俗研究会，1972）所収の漢文笑話集などから類似内容を探った。また，「花間笑話」については，湯城吉信「『花間笑話』と江戸小咄との関係について」（『大阪府立工業高等専門学校研究紀要』37号）を参照した。

「困譚」は，平成22年度本学人文科学研究科の講義に使用したテキストである。二村文人先生・森賀一恵先生から多くのご指教を賜った。記して感謝を表したい。

なお，小論は，平成22年度科学研究費補助金基盤研究（C）「漢文笑話の研究—江戸笑話の性格と内容について—」（課題番号22520353 代表：磯部祐子）の研究成果の一部である。